

## 近世後期の名主日記について

### — 林信海日記の紹介 —

#### 小暮 利明

昭和六〇年度事業として、入間郡赤尾村(現坂戸市赤尾)林家文書目録を整理刊行した。総点数一万点をこえる文書群であるが、その中で興味を注がれたのは、日常の生活を丹念に書き留めた「日記」「記録帳」類である。しかも、その大部分が林家十三代目当主信海(一八〇四—一八六二)の手によることである。

林信海については、すでに『埼玉県人物誌』(岸伝平氏稿)・『坂戸人物誌』(井上慎一氏稿)や『埼玉史談』の巻十一の二に「井上淑蔭と林信海」(稲村坦元氏稿)によって広く知られている人物である。従って、ここでは林家及び信海について、その概略を示すにとどめる。

林家の出身については未詳であるが、当家の由緒書によれば、「先祖民部(信興)義、信濃国小泉郡林郷(現上田市林之郷カ)より文龜年間(一五〇一—一五〇三)赤尾村へ移住、村方開発をおこない代々里正となったとある(林家文書七六七〇)。また天保二(一八三二)年の『林本家記録帳』に収録された林家系図にも「古伝曰、信濃国より当村に移住」したとあり、その時「産神諏訪上・下御石持

来たり」と記され、現在もその石が林家に大切に保存されている。

いずれにしても、林家は三代信正(図書)以来、代々赤尾村下分の名主を務めており、十一代幸藏(佐伝治)の代、文化元(一八〇四)年に、これまでの名主としての功を賞され、川越藩から、苗字を差許された(同文書三二三五)。十二代信豊(半三郎)及び十三代信海(半三郎)も治水、殖産に実績をあげ、度々褒賞に授けられているが中でも信海は、安政元(一八五四)年に頭取名主格を仰付けられている(同文書二四八七)。

明治期に入っても林家は村政にたずさわり、十五代信臣(半三郎)は、赤尾村戸長、連合戸長を務め、さらに県會議員などを歴任した。また十六代織善は、勝呂村長、坂戸町初代助役、県文化財専門調査員の要職を務めた人物で、先に示した『坂戸人物誌』に「林織善」として井上慎一氏が著している。

林信海は、父信豊、母志げ(行田本県富田氏女)との間に三男五女の長男として文化元(一八〇四)年六月十四日に生れた。母志げは「赤女」と称して和歌に堪能な女性であった。その影響を受けてか

信海も好學心が強く、親戚筋にあたり、しかも同年の石井村の井上淑蔭と共に、江戸の國學者清水浜臣（一七七六—一八二四・通稱玄長、泊酒舎また月齋とも号した。）及びその養嗣子、光房の門人となり、國學と和歌を學んだ。

信海は「桜園」と号し、居宅を茅子舎、または秋廼舎とも稱して数多くの和歌を残しているが、なかでも文政六（一八二二）年から弘化二（一八四五）年までに著した「咏草」（全九冊）は信海の和歌の集大成ともいえるものである。

このように信海は大變好學家であつたことにより、当然の如く一赤尾村の名主としての交際簡冊をはるかに越えて多くの人物（文人）との交わりがみられる。先にあげた石井村井上淑蔭（通稱多藏、櫻亭とも号した）、飯能の大河原亀文（通稱文佐衛門、包章、夾彦とも号した）、吹塚村の田中正勝（通稱清右衛門、嶋能屋とも号した）さらには遠く伊勢の御師、三日市次郎大夫父子とも檀家の枠をこえて、和歌の交換など文化的な交際を続けた人物である。

一方、名主役としての信海は、天保二（一八三一）年から病身の父を助け、その代役を務め、弘化元（一八四四）年、正規の名主となつた。その後、安政元（一八五四）年「名主勤役中、頭取格申付」（同文書二八四七）によって、より広簡冊にわたる役務を負つた。また信海は、川越藩の財政建直しについても建言書を著しており、積極的な活動をおこなつた人物でもある。

没年は、文久二（一八六二）年三月一〇日、法号を「慈光院善護明

道信海居士」といい、林家門前の墓地に妻銀子（鎌形村長島武兵衛三女）と共に葬られている。

林家の日記・記録の現存状況についてみると、信海の父信豊の手によるものが若干みられるが、圧倒的数量を示しているのが信海の手によるものである。

大別すると、家庭内の日々の出来事等を書留めた家内記録類、私用、役向等で川越をはじめとする近隣宿村へ外出した際に記録した他出日記類、箱根等参詣及び湯治に出掛けた際、所々見聞の記録を書留めた旅行記録、さらに小遣帳及び金銭出納帳に区分される。

形態については、家内記録類・小遣帳及び金銭出納帳はほとんどが横長帳である。これに対し、旅行記録類は横半帳であり、中でも他出記録帳は縦十八センチメートル、横七センチメートルというコンパクトなもので常に携帯して書き留めるのに便利な大きさである。

これら携帯した記録帳には、自己の行動及び金銭出納も逐一記録しているが、先に述べたように、和歌を學んだ一人として、時折その片鱗がのぞかれる。特に旅行記には旅の先々で和歌を記しており、和歌の創作に意欲的に取りくんだ様子が偲ばれるものである。

信海は同期日に何冊もの日記・記録を残しているが、信海自身も自己の筆まめを自覚しており、生来自分は諸々の事柄を記録し整理することが大變好きであると述べ、記録を残すことの理由を「此日



文化四	文政二 ㉞ 家内日記帳	横長二三五	① 小遣帳 横長(中)	九四				
文化五	文政三 ㉟ 家内日記帳	横長二三六						
文化六	文政四 ㊱ 家内日記帳	横長二三七						
文化七	文政五 ㊲ 家内日記帳	横長二三六						
文化八	文政六 ㊳ 家内事日記覚帳	横長二三九						
文化九	文政七 ㊴ 家内事日々書記覚帳	横長二四〇						
文化一〇	文政八 ㊵ 家内日記帳	横長二四二						
文化一一	文政九 ㊶ 家内日々事記覚帳	横長二四三						
文化一二	文政一〇 ㊷ 家内日記帳	横長二四三						
文化一三								
文化一四								
文化一五								
文化一六								
文化一七								
文化一八								
文化一九								
文化二〇								
文化二一								
文化二二								
文化二三								
文化二四								
文化二五								
文化二六								
文化二七								
文化二八								
文化二九								
文化三〇								
文化三一								
文化三二								
文化三三								
文化三四								
文化三五								
文化三六								
文化三七								
文化三八								
文化三九								
文化四〇								
文化四一								
文化四二								
文化四三								
文化四四								
文化四五								
文化四六								
文化四七								
文化四八								
文化四九								
文化五〇								
文化五一								
文化五二								
文化五三								
文化五四								
文化五五								
文化五六								
文化五七								
文化五八								
文化五九								
文化六〇								
文化六一								
文化六二								
文化六三								
文化六四								
文化六五								
文化六六								
文化六七								
文化六八								
文化六九								
文化七〇								
文化七一								
文化七二								
文化七三								
文化七四								
文化七五								
文化七六								
文化七七								
文化七八								
文化七九								
文化八〇								
文化八一								
文化八二								
文化八三								
文化八四								
文化八五								
文化八六								
文化八七								
文化八八								
文化八九								
文化九〇								
文化九一								
文化九二								
文化九三								
文化九四								
文化九五								
文化九六								
文化九七								
文化九八								
文化九九								
文化一〇〇								

⑧ 出羽奥州坂東日横半(四六)  
坂東日光道中記横半(四九)

① 小遣帳 横長(中) 九四  
 ② 小遣帳 横長(中) 九二  
 ③ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ④ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑤ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑥ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑦ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑧ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑨ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑩ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑪ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑫ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑬ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑭ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑮ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑯ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑰ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑱ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑲ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ⑳ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉑ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉒ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉓ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉔ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉕ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉖ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉗ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉘ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉙ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉚ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉛ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉜ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉝ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉞ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㉟ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊱ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊲ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊳ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊴ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊵ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊶ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊷ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊸ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊹ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊺ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊻ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊼ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊽ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊾ 小遣帳 横長(中) 九三  
 ㊿ 小遣帳 横長(中) 九三

⑳ 日記帳(役務)  
 竖長  
 一六五

※十一代幸蔵  
(佐伝治)没

年代	項目	家内記録	形態	No.	金銭出納記録	形態	No.	小遣記録	形態	No.	公・私外出記録	形態	No.	旅行記録	形態	No.	摘要
文政二	△林本家内日記	横長	三三四														
文政三	△林本家万日記覚帳	横長	三四五														
天保元	△林本家万日記覚帳	横長	三四六														
天保二	◎年中万日記帳	横長	三四七														
天保三	◎年中万日記帳	横長	三四八														
天保四	◎家内万日記帳	横長	三四九														
天保五	◎家内其外日記覚帳	横長	三五〇														
天保六	◎家内其外万日記帳	横長	三五二														
天保七	◎家内其他万日記帳	横長	三五三														
天保八	◎歳中万日記覚帳	横長	三五三														
天保九	◎日記覚書帳	横長	三五五														
天保〇	◎万覚日記帳	横長	三五四														
天保二	◎年中行事家内記録	横長	三五六														
天保三	◎年中行事家内記録	横長	三五七														
天保四	◎家内記録見聞日記	横長	三五八														
弘化元	◎家内記録見聞帳	横長	三五九														
弘化二	◎家内記録見聞帳	横長	三六〇														
					◎金銭出入毎月度々調帳	横長(中)	二八六	◎年中小遣帳	横長(中)	二八三							
					◎金銭出入毎月度々調帳	横長(中)	二九三	◎年中小遣帳	横長(中)	二八六							
											◎世間見聞録(近郷由緒)	縦帳	二九六				
											◎萬事記録	横半(小)	二四九				
											◎他出中日記帳	横半(小)	二四九				
											◎他出雅談記録	横長(小)	二四三				
											◎東の國巡見乃日記	横半	二四六				
											◎旅路日記	横半	二四七				

※十二代信豊没、信海名主となる。

※十四代信徒生まれる。

※信海父の名主代役をはめる。

弘化三	◎家内記録見聞帳 横長二三四	◎金銭出入并諸覺 横長二八七	◎年中小横長(申)一六四 遺帳			
弘化四	◎家内記録見聞帳 横長二三五	◎金銭出入并年中覺 横長二八八	◎年中小横長(申)一六六 遺帳			
嘉永元	◎家内記録見聞帳 横長二三六	◎金銭出入并諸事覺 横長二八九	◎年中小横長(申)一六八 遺帳		◎他出雜記帳 横長(小)二四九	
嘉永二	◎家内記録見聞帳 横長二三七	◎金銭出入并諸事覺 横長二八〇	◎年中小横長(申)一七〇 遺帳			
嘉永三	◎家内記録見聞帳 横長二三八	◎金銭出入并諸事覺 横長二八二	◎年中小横長(申)一七二 遺帳			
嘉永四	◎家内記録見聞帳 横長二三九	◎金銭出入并世用覺 横長二八三	◎年中小横長(申)一七三 遺帳			
嘉永五	◎家内記録見聞帳 横長二四〇	◎金銭出入并世用覺 横長二八三	◎年中小横長(申)一七三 遺帳			
嘉永六	◎家内記録見聞帳 横長二三三	◎金銭出入并世用覺 横長二八四	◎年中小横長(申)一七四 遺帳		◎他出雜記帳 横長(小)二四五	
安政元	◎家内記録見聞帳 横長二三三	◎金銭出入并世用覺 横長二八五	◎年中小横長(申)一七五 遺帳			◎相州箱根山中温 泉逗留之記 同、入用割合之 覺
安政二	◎家内記録見聞帳 横長二三三	◎金銭出入并世用覺 横長二八六		◎他出雜記帳		
安政三	◎家内記録見聞帳 横長二三四	◎金銭出入并世用覺 横長二八七	◎年中小横長(申)一八三 遺帳		横長(小)二四六	
安政四	◎家内記録見聞帳 横長二三三	◎金銭出入并世用覺 横長二八六	◎年中小横長(申)一八三 遺帳			◎箱根温泉往復還 留中雜記 箱根入湯中并往 復記
安政五	◎金銭出入并世用覺 横長二八元	◎年中小横長(申)一八〇 遺帳				
安政六	△金銭出入世用覺帳 横長二八四					△秩父三拾四ヶ所 順礼手控
安政七	△金銭出入世用覺帳 横長二八五					
万延年				(文久元年まで)		◎信州諏訪参詣入 用日記
文久四	◎金銭出入世用覺帳 横長二八二					横半二四七五

近世後期の名主日記について(小暮)

※文久二年信  
海没

項目	年代	家内記録	形態	No.	金銭出納記録	形態	No.	小遣記録	形態	No.	公・私外出記録	形態	No.	旅行記録	形態	No.	摘要
	元治二				①金銭出入世用覚帳	横長	二八四三										
	慶応三				①金銭出入世用覚帳	横長	二八四四										
	慶応四				①金銭出入世用覚帳	横長	二八四五										
	明治三				①金銭出入世用覚帳	横長	二八四六										
	明治四																
	年未詳																
														①青葉乃日記	横半	三八七	
														①仁志気能美知	横半	三八五	
														①見分雜記	横半	七五四	
														①見聞雜記	横半	七七五	
														①免都らの旅日記	豎帳	七〇三	
														①免都良の旅日記	豎帳	七〇六	
														①(「旅路日記抜粹」)	横半	七七七	
														①概交旅日記	横半	七七四	

一、表中の①は、記録者の記号を示し、次のとおりである。なお判別しがたいものには△印をつけた。

① 林家十一代当主 幸蔵(佐伝治)

② 十二代当主 信豊

③ 十三代当主 信海

④ 十四代当主 信徒

二、形態については、一応次のとおりにして示した。

豎帳——料紙を豎に二折にし綴ったもの(約二十五×横十六センチメートル)

横長——横長帳の略、料紙を横に二折し綴ったもの(約十二×横三十三センチメートル)

横半——横半切帳の略、横長をさらに二折して綴ったもの(約十二×横十六センチメートル)

横長(中)——横長と横半の主間位の大きさ、(約十一×横二十六センチメートル)

横長(小)——横半よりも小さく、形は横長帳と同じもの(約八×横十五センチメートル)

林信海と記録帳

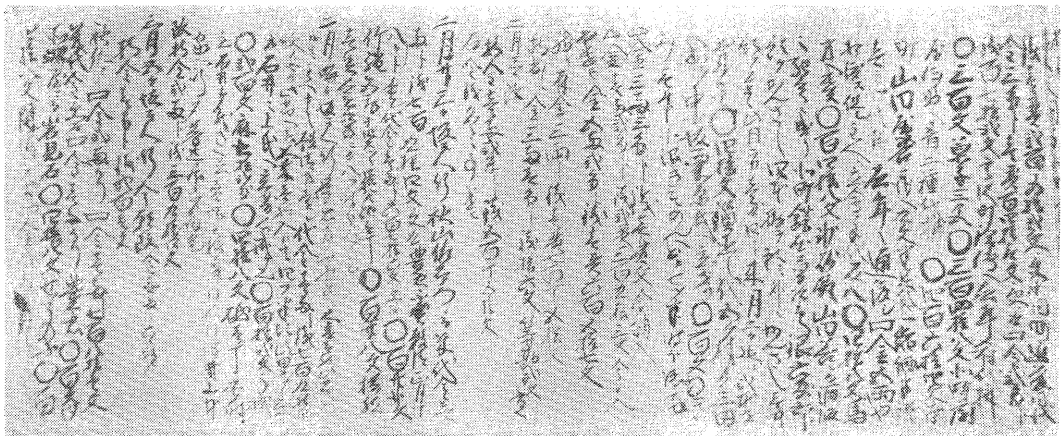


- 左より 「家内記録見聞帳」 (12×33cm)
- 「年中小遣帳」 (11×26.5cm)
- 「金銭出入毎月渡々調帳」(9×23.5cm)
- 「他出俗雅記録」 (7×18cm)



※いずれも天保15(弘化元)年のもので信海の手による。

(信海肖像画)



「他出俗雅記録」の内容(部分)



(表紙)

天保十五甲辰年 正月より

他出 雅 記録

嘉永元戊申年九月迄

武州入間郡赤尾村

林氏本家主入

正月二日、昼々石井村大智寺へ如例年、為年始參ル、

去年迄者茶計り之処、今年者俗ニ亭主之好ヲ客ニ振舞与歟言如く、  
汁粉ヲ被振舞、夫々源六方へ立寄、又、多造方へ立寄、酒之馳走ニ

成ル、但シ主人者不居、年礼ニ出由、夫々井上本家へ行、酒之馳  
走ニ成ル、是茂主人者不居、去年、古河へ行未帰由、○百四拾文酒

壺升、佐文次方へ為進物、今日供仁平連行、夕暮掃宅、○錢三百文  
広武帖・扇子箱大智寺へ、広武帖源六へ、広武帖・扇子壺対多造へ、

持錢八百拾九文、内百四拾文、酒代遣ヒ

(同金四兩貳朱 正月四日朝入)

\*石井村——現坂戸市石井

\*大智寺——新義真言宗寺院、山城国醍醐無量寿院末、龍護山実相院と  
号し、赤尾村光勝寺の本寺

\*多 造——多藏・井上淑蔭、林信海と従弟

\*井上本家——井上淑蔭の本家、当主佐文次

\*仁 平——林家奉公人

正月四日、川越初出勤、御宅へ年始也、伊草通り、坂下式軒、夫

々北町字王門茶漬へ立寄、○百拾六文高沢角忠ニ而○金壺分ト錢四  
百廿九文払、此誤ケ△式匁式分西門壺帖、▷八匁壺分半紙廿七帖、  
拾帳ニ付銀三匁、△六匁土佐小半紙四拾帳、△廿八文水引壺把、△

七匁式分扇子三箱、江戸町ニ出テ、通町通り、西町同家新・田嶋新  
田妙正寺下十念寺門前ニ而今日者帰路ニ趣、今日大暖気也、○百文

茶、○拾六文髮結錢、○四拾八文切芋三筋、○廿四文紺木綿糸三  
れ、○百文菓子平塚ニ而、○三百文筆十本・墨五丁、下小坂武兵衛

方ニ而、中小坂村栗原七郎兵衛方へ年礼ニ立寄、半紙式帳・扇子壺  
対為年玉、夫々紺屋小沼きそ免へ出テ、夕暮ニ掃宅

遣ヒ錢壺貫貳百七拾七文、金壺分也、残り金三兩貳分式朱ト錢壺  
貫百三拾九文 算勘廿三文不足

錢三百六拾四文、正月七日入、内七百拾貳文十五日出ス

同四百廿八文、十五日入、改金貳兩貳朱ト錢壺貫貳百六拾七文

\*伊 草——現川島町伊草、入間川、越辺川合流付近に渡船場があつた。

\*坂 下——現川越市志多町・善多町

\*西門壺帖——西之内紙壺帖、紙の名称

\*北 町——現川越市善多町

\*高沢町——現川越市元町

\*江戸町——現川越市大手町

\*通 町——現川越市通町

\*西 町——現川越市元町辺カ

\*田嶋新田——現川越市野田又は野田新田カ、「新記」によれば野田村に

田島氏(久左衛門)が住していた。

\* 妙正寺——妙昌寺カ、法華宗寺院、池上本門寺末で法真山と号し、最

初は多賀町にあったといわれ、寺跡がある。

\* 十念寺——時宗寺院、相模藤沢清光寺末で清谷山と号する。

\* 平塚——現川越市平塚

\* 下小坂——現川越市下小坂

\* 中小坂——現川越市中小坂

\* 栗原七郎兵衛——惣代名主

\* 紺屋——紺屋村・現坂戸市紺屋

\* 小沼きそ免——小沼村は現坂戸市小沼、きそめんは小名

正月十六日、石井村井上氏へ用事有之、<sup>\*</sup>扇町屋善太郎ニ被頼<sup>レ</sup>着物受取、利足不足錢〇三拾六文立替、佐文次へ渡ス

\* 扇町屋——現入間市扇町屋

正月十七日、四ッ過ニ出宅、坂戸へ出テ扇町屋へ行、森戸村並木ニ而休ム〇廿四文、七ッ時分粕谷氏宅ニ着、酒宴、夜ニ入、五ッ過ニ床ニ入、書物見、夫々<sup>(巻)</sup>ねぬ、兼而当家主人ニ被相願<sup>レ</sup>唐さんとめ小袖ヲ昨日石井井上氏<sup>ノ</sup>受取、持行渡ス

\* 森戸村——現坂戸市森戸

\* 粕谷氏——粕谷善太郎政苗、信海妹志かの嫁ぎ先

\* 唐さんとめ——唐棧留、細番の諸摺綿糸で平織にした雅趣のある縞織物、

『日本風俗志』には「武州川越で多く模織す」とある。

近世後期の名主日記について(小暮)

正月十八日、昨夜少々雨降、今朝者如例決晴也、朝飯後□屋半六方へ年始礼ニ行、半紙式帖、扇子沓封為年玉、直ニ立帰り、□金貳拾兩也時借、外ニ金五兩也受取、是者井上氏無尽講金之内出金也、□金壹兩沓分ト錢四貫百廿八文、井上氏質ニ入置<sup>レ</sup>夜着ヲ粕谷氏受取置<sup>レ</sup>、金受取、□錢三拾六文、昨日井上氏へ立替渡<sup>シ</sup>錢受取、五ッ時過ニ出立、高萩ヲ過、昨日休ミ<sup>レ</sup>所ニ而休ム〇拾貳文茶代、拾六文わらんじ沓足、供興<sup>(二)</sup>平分私、秋山<sup>ノ</sup>米代金貳貳式朱、錢四百拾六文、豊忠<sup>ノ</sup>米代金壹兩ト五百九文、□金貳兩ト壹貫四百拾五文受取、□金壹兩ト壹貫四百拾五文受取、□金壹兩ト錢五百九文穀清<sup>ノ</sup>米代受取、此所<sup>ノ</sup>馬方林平与同道、石井ニ而別れ、井上氏本家へ立寄、□金壹兩分ト錢四貫百廿八文、佐文次へ渡ス、□金貳拾五兩之外ニ金五兩者多造へ渡ス、但シ内金五兩者我等出金分也、明日ニ茂及掛合、塚越<sup>ノ</sup>より田ヲ可受返<sup>レ</sup>与申談置<sup>レ</sup>、尤我等出金五兩へ足、八兩与成し、大智寺前之山ヲ可受戻<sup>レ</sup>、是又及申談<sup>レ</sup>事、夕方帰宅

残り金三兩沓分ト錢三貫八百四拾六文、出遣ヒ金五兩ト錢貳百拾文、入金六兩貳式朱ト錢貳貫九百四拾九文、同断式拾六兩沓分ト錢四貫百廿八文、是者石井井上氏へ渡ス、廿五兩也、多藏へ渡ス、〇百文胤<sup>\*</sup>之助へたこ糸代遣ス、出金五兩也

遣ヒ合錢三百拾文、算勘五拾七文不足、改持金三兩沓分ト錢壹貫ト四拾六文

十九日改、右之内、錢百文、正月廿一日出ス、錢壹貫三拾文出ス

- \*高 萩——現日高町高萩
- \*わらんじ——わらんじの方言
- \*秋 山——秋山佐右衛門・坂戸の穀物商
- \*豊 忠——豊島屋忠右衛門・坂戸の穀物商
- \*穀 清——穀屋清八・坂戸の穀物商
- \*塚 越——現坂戸市塚越カ
- \*胤之助——信海の次男、十四代信徒の幼名

正月廿八日、川越へ私用ニ而参ル、伊草通り、五ヶ村鍛冶屋源次郎方へ立寄、鎖ヲツナキ頼ム、○廿五文団子、北町万忠ヲ大豆代金三分ト銭壹貫貳百五拾貳文受取、同町近藤同代金三分ト壹貫百四拾壹文受取、□金貳分ト銭百七拾貳文、高沢町鈴伝へ去年肴代払、○三百文菓子三色、○三百四拾八文北町扇屋伊助へ肴二種代払、○四百六拾四文南町山田屋善兵衛へ九文半足袋一、縮緬半襟壹かけ代払、去年之通渡シ、□金五両也相渡ス、但し主人へ立会手代友八、○四拾八文馬方へ遣ス、○百四拾八文氷砂糖、山田善ニ而酒飯之馳走ニ成リ、北町鏝屋勇次郎へ銀六匁六分預け、かんさし四本拵ヲ頼ミ、外ニかんさし壹本預置キ、此目方壹匁四分、来月二日迄ニ貳本者出来由、五ヶ村ヲ三田へ出テ、中小坂栗原氏へ立寄、○百文むきみ壹升、小沼きそめんへ出テ、七ツ半時分掃宅

□金三両三分ト銭壹貫文、今朝入、△金壹兩貳分ト銭貳貫三百九拾三文、今日入

出遣ヒ金五兩貳分、銭壹貫六百五拾七文、残り有金三兩ト銭壹貫

七百丁五拾文、持出し金三兩壹分ト銭拾文、算勘貳文不足  
二月三日改、持金壹兩貳分ト銭五百丁五拾文不右金銭色々之事ニ遣ヒ

- \*五ヶ村——寺井(現川越市)五ヶ村寺井宿・寺井松郷・寺井伊佐沼・東明寺・小久保
- \*万 忠——万屋忠右衛門・川越の穀物商
- \*近 藤——近江屋藤兵衛・川越の穀物商
- \*鈴 伝——鈴木屋伝藏・川越魚商
- \*扇屋伊助——魚屋
- \*南 町——現川越市元町一・幸町・末広町二
- \*山田善兵衛——呉服商
- \*三 田——寺井村の小名カ
- \*むきみ——蛤・浅蜷の中の肉カ

二月廿三日、坂戸へ行、秋山佐右衛門ニ而米代金壹兩ト銭七百九拾四文受取、豊忠不売、穀清正月十八日分売レ、代金壹兩ト六百七拾文受取、○百廿貳文竹繩五房、十四文ツツ、四拾八文砥壹丁、○廿八文楨駄壹足太郎次方ニ而、八ツ時分掃宅

\*竹 繩——竹を割って肉をたたいて繩になったもの、火繩にも使用した。

二月晦日、坂戸へ行、豊忠方不宜由、大麦壹駄此宿へ入由、主

人申之、穀清方売レ、代金壹兩ト錢七百九拾四文受取、此宿へ茂大  
麦壹駄入由、四ツ半頃此里ヲ立出、石井井上氏へ立寄心掛ケ也、  
○百貳拾文手拭、○貳百文麻七拾貳匁、○四拾八文砥石壹丁、九ツ  
時過石井多藏方へ着、昼喰被振舞、同人同伴井上本家へ行、夕暮迄  
居、夫々帰宅

改持金貳兩ト錢三百九拾四文、

三月五日、坂戸へ行、今朝改持金壹分ト錢貳百壹文、(金壹兩六  
日朝入)秋佐々□金貳兩かり、□金壹兩ト七百八拾壹文、米代金ニ  
受取、□金壹兩かり豊忠、○百文同所堺屋ニ而岩見石、○四拾八文  
せうのふ、○百四拾八文燗酒三合、□金貳兩分穀清ニ而かり、帰路  
石井多藏方へ立寄、昼喰被振舞、同人本家佐文次方身上向一件願相  
談ニ而八ツ時分帰宅

\* 岩見石——岩見銀山の砒石で製した殺鼠剤、  
\* せうのふ——樟腦・防虫剤

三月六日、村方入牢人一条ニ付御呼出し之処、外ニ戸崎山杉木代  
へ差防人有之ニ付、世話人藤左衛門・藤右衛門兩人同道ニ而四ツ時  
川越着、本町三之助方へ立寄相咄し居、今日桑原様御義紺屋村へ  
御出張ニ付、手代熊右衛門御供ニ参り居居間、御出之上御話被成  
ハハ、何レ与歟可相成与之事故、札之辻へ出掛ケル処、源右衛門始  
メ大勢之ものニ出会、同道ニ而御留リニ至リ、夫々兩人之もの妙養

寺門前名主方へ行居、留守ニ付、下役半藏方へ行及申談、同夜四  
ツ時分未別、依之石原ニ至リ大黒屋ニ止宿、○四百四拾文兩人之も  
の昼喰、夕飯代

\* 戸崎山——現川越市中老袋入間川流域に位置した杉林カ

\* 札之辻——高札場・本町・高沢町・南町・北町の四街の接する辻、川  
越の中心地

\* 妙養寺——橘町(現川越末広町二丁目)の日蓮宗寺院・妙養寺門前町と  
呼び、四門前の一つ。

\* 石原——現川越市末広二・三丁目

三月七日、晴天、朝飯後□金貳兩、藤左衛門へ渡ス、⊕三百文酢  
屋々入□金貳朱ト百五拾壹文、北町万忠々大麦代入、○百七拾貳文  
岩城紙三帖六十枚、○三百六文さらし木綿六尺、○七拾貳文味淋式  
合、□金貳朱ト三拾壹文すりきぬ六尺、○百廿四文旅籠代壹人分、  
○貳百三拾貳文式人分、内八文ひけ、メ三百四拾文、大黒屋へ払、  
今四ツ時迄待呉居、妙門前半藏在中待居、七拾貳文味淋酒貳合、  
○百八拾文下町鍛冶屋ニ而鎌彦丁、○五百四拾八文、馬之くくみ一  
下リ、八ツ時分迄大黒屋ニ居、昼喰代かり、立出テ七ツ前紺屋村栗  
原氏へ立寄、従村方万吉来リ、差添出ル、御繩付ニ成ル、依之小組  
合惣代南吉田村名主雄吉相頼御歎申上居、深更ニ相成リ、明日与  
御聞有之ニ付、今夜栗原氏ニ止宿、藤右衛門同宿、藤左衛門同村(欠  
字)方ニ止宿、此(欠字)宅ニ而夕飯々世話ニ成ル、己者栗原氏ニ而

夕飯被振舞

\* 岩城紙——磐城郡の地で生産された紙

\* 味淋(酒)——焼酎・糯飯・麴を混和して醸造し、かすをしぼりとった酒

\* すりきぬ——摺衣・染め草の汁で種々の模様を摺り付けて染めだしたも

の

\* くくみ——轡(くつわ)

\* 南吉田村——現坂戸市上吉田近辺カ

三月八日、晴天、昨夜八ツ時分迄起居、雄吉与同宿、今早朝起、万吉へ心服之趣、再度聞之、当人組頭立合、村役人連印ニ而御歎キ下ケ頼ミ之一札ヲ雄吉へ認渡ス、今朝茂朝飯被振舞、嶋田并妙門前役人共、当人共同道ニ而来リ、御利解被仰聞有之、万吉者御歎下ケ成ル、□金ニ朱万吉ヲ受取、但シ藤左衛門共朝夕拾三賄食し由、四ツ時分々下寺山村中野氏立寄、昼食被振舞、夫々同村名主平内方へ行、八ツ時分熟談成リ、□金貳分也、御目明熊右衛門へ渡ス、夫々皆々手打之上、一同御礼ニ出ル、夫々己老人川越へ参リ、南町三之助方へ立寄礼申述、但シ留守内へ、直ニ立帰ル、○三拾貳文わさび、○三拾貳文わらんじ沓足、帰路ニ紺屋村(欠字)方へ立寄、○四百四拾八文米四升五合代、○三文増増代遣ス、小沼村々日暮、帰宅残り金三分式朱ト錢四百八拾五文、入金貳分式朱ト錢五百五拾沓文、出金貳分式朱ト錢三百拾沓文、持出し金沓兩沓分ト錢六百八拾貳文、算勘、錢七拾三文不足

三月九日、於御留調之、

\* 嶋田村——現坂戸市島田

\* 下寺山村——現川越市寺山

\* 南 町——現川越市幸町、蔵造りの大沢家住宅(国指定)がある。

\* 塩 噌——塩と味噌、又、味噌の異称

三月九日、晴天、早朝々川越へ出勤、入牢一件のもの御召出し、五ツ半々御刻限之処、七ツ時分相済、夫々榎本へ引取止宿、源右衛門、戸右衛門、秀吉与四人同宿、

\* 榎 本——榎本弥次右衛門、川越族籠屋主人

\* 源右衛門——安野源右衛門、赤尾村の名主

\* 戸右衛門——赤尾村組頭

三月十日、朝霧、晴かかり大南風、四ツ時分御宅廻リ、久保町、通丁辺、蓮門前相模屋へ立寄、○貳百六拾四文さつま産かつを婦し沓本、六拾四番歌結一冊かり、鍛冶町ニ出テ、○廿文髪結錢、榎本ニ而昼喰食之、南町へ田へ行、ゆかた反物沓反受取、夫々御役所へ御受書差上、町へ出テ角麻喜ニ而、○百文三分のミ沓本、夫々高沢町伊勢金へ立寄、酒、蕎麦飯食、夕方々出立、紺屋々夜ニ入、五ツ時分帰宅

持金改三分式朱ト錢百文内式分十二日朝金箱入

\*久保町——現川越市久保町

\*蓮門——蓮馨寺門前・蓮馨寺は浄土宗寺院・関東十八檀林の一つ川

越四門前町(行伝寺門前町・養壽寺門前町・妙養寺門前)の一。

\*相模屋——川越蓮馨寺門前の乾物商

\*鍛冶町——現川越市幸町

\*角麻紬——麻屋善右衛門・金物商カ

\*伊勢金——割烹料理店

三月十一日、粟生田村へ五人御改ニ付出勤、坂戸清太郎方へ帰路ニ立寄、酒ヲ呑、成就院、西光寺落合、凡壹升五・六合茂呑、期廿日立出石井々日暮、夜ニ入帰宅

\*粟生田村——現坂戸市粟生田、泉町・三光町・仲町・中宮町の一部

\*成就院——赤尾にある曹洞宗寺院、龍ヶ谷村龍穩寺末、天神山と号する。

\*西光寺——塚越にある曹洞宗寺院、龍ヶ谷村龍穩寺末、宝福山と号する。

三月十二日、喜四郎、万吉同伴川越へ、桑原様へ御礼ニ出勤、尤昨日村方金石衛門々伝言、同心町梶間様々可罷出様ニ与名主へ可申伝之由、四ツ時分川越へ着、○廿四文とく里壹ツ、○三百七拾弐文牛房たね壹合五夕、多賀町相田屋伝七方ニ而○百八拾八文梅花油壹合八夕、○百拾八文するめ十枚、○百三拾弐文塩いなた壹本、北

近世後期の名主日記について(小暮)

町扇屋伊介方ニ而、○四百拾六文硯式面、筆壹本、四拾八文墨壹丁、銀壹匁式分、高沢町近江屋興八方ニ而、紺屋村中道ニ入、八ツ時分帰宅、喜四郎者南町ニ而別レ、万吉斗り同道也

残り金貳朱ト錢四百拾七文、内四拾七文錢箱入、遣ヒ金壹貫貳百五拾八文、算勘拾五文不足、又金壹分貳朱、三月十六日入

\*同心町——現川越市幸町

\*多賀町——現川越市仲町・幸町

三月十六日、横見郡黒岩村秋庭太玄方へ娘御多女ヲ連行、松山町へ廻り、糍屋ニ而昼喰酒代、但シ味淋壹合、肴者ひらめ三きれ、此代○三百四拾八文、○百文茶代、○拾弐文岩殿観音参詣、○百文あんころもち、○廿四文箭弓稻荷参詣、帰路又古凍村ニ出テ、天神渡しニ掛り、八ツ時分帰宅、遣(以下欠字)残り金壹分貳朱ト錢六百廿四文

\*黒岩村——現比企郡吉見町黒岩

\*多女——信海の子カ、林家系図に該当者なし

\*松山町——現東松山市

\*岩殿観音——坂東十番札所、新義真言宗岩殿山正法寺、地内の物見山岩殿観音は県名勝

\*箭弓稻荷——東松山市箭弓町の稻荷大明神

\*古凍村——現東松山市古凍

\*天神渡し——越辺川通りの渡し場・赤尾村への入口

三月十八日、出府、四ツ時分川越へ着、金沓両式分式朱ト錢八百七文北町万忠ヲ麦代受取、九ツ時分大井ニ至リ昼喰○百文、○八文大雨休ム、足痛ニ付白子ニ至リ亀屋ニ止宿。

\*大 井——現入間郡大井町

\*白 子——現和光市白子

三月十九日、五ツ時分巢鴨ニ入、夫ヲ湯島天神、池端辺ヲ弁天社へ参詣、○拾六文散錢、上野山中へ上リ所々拜見、山下山吹ニ而昼喰、○百三拾五文三人割、夫ヲ清水先生へ立寄、進物鶏卵廿八、夫ヲ広小路ニ出、神田御門外辰金屋ニ而○五百拾八文桐油一、金式朱渡し、返リ式百拾沓文かヘル、日本橋宝町ニ至リ丸屋源三郎方へ立寄、荷物沓包預ケ置、同所伊勢屋幸藏方へ立寄鶏卵廿三為土産、日本橋渡り、河岸通り呉服橋御門ヲ入、大名小路通り西御丸下土井大炊頭様御屋敷へ多藏上リ内待居、夫ヲ芝ニ出テ増上寺へ参詣、七ツ時分品川宿ニ至リ富沢屋ニ止宿、今朝付落、白子旅籠代○百八拾文酒肴代割○八拾文、今夜宿屋海辺なれハ、めつらしく同伴多藏并供之男三人ニ而酒肴取寄のミか者しておもしろく遊ひて禰ぬ。

\*清水先生——信海が師事した国学者、清水浜臣(一七七六—一八二四)の

嗣養子清水光房・養父と同様「泊酒舎」と号した。

\*土井大炊頭——土井利位・下総古河藩主

三月廿日、曇、但シ一時出立々曇、今朝海面殊ニ霞めるさまいとおもしろし、○式百八拾文、旅籠并酒肴代三人割分、四ツ時過大師河原村ニ至リ、弘法大師御前ヲ奉礼拜、○三拾六文散錢、○九文茶代三人割、○式百三文昼喰酒代三人割、品川浜川町ニ而○式百四拾文海苔式状、○四拾八文(焼酎)ちう式杯、○廿四文髮結錢、今夜品川宿村田屋ニ止宿、今日未七ツ前之処、大雨ニ成ル、但シ大師河原々雨降始メ途中之難義無抛、此宿ニ止ル

\*大師河原村——現神奈川県川崎市

三月廿一日、曇、止宿料○式百文、○百三拾七文酒肴代三人割、高輪海辺茶屋松之尾ニ而休ミ○拾六文、○拾五文水天宮・愛宕山参詣、散錢、夫ヲ丸之内ニ入、土井様御屋敷へ多藏入、待居、呉服橋渡り、日本橋宝町丸源ヲ預ケ物受取、金沓両式分英へ渡し、○百四文革五筋、金沓分ト錢三百三拾三文妻応御社へ上ル、娘あい女虫御守頂戴料、○百文上同御社へ奉納、金式分鼻紙入ハ懐中袋へ入、○四拾文根式本、○拾文とうしんおさい沓ツ、○銀八拾四匁六分本屋買物代銀、○拾式文梨子、今八ツ半頃上野応小路崎玉屋安兵衛方ニ至リ止宿、多藏并かしら者兩國ハ浅草ニ廻リ連言、林英ニ而相別レ行、○八拾九文昼喰、今日迄遣ヒ之分改、金沓両沓分式朱ト錢式百拾沓文、書物代錢式貫ト六文、金沓分ト錢百三拾三文妻応御社へ上ル、金五百拾八文桐油沓枚、四筆合、金沓両式分式朱

ト三貫貳百五拾貳文

\* 英 —— 藤原英淑・井上多藏(淑蔭)のこと

\* 妻 応 社 —— 港区の西応寺カ

\* あい女 —— 阿い・信海の三女

\* 虫 御 守 —— 疍の虫の御守・まじない札

三月廿二日、雨天、○拾四文昨夜湯銭、早朝仲町へ行、○百三拾文硯沓ツ、朝飯後、山下清水先生へ尋、訊先生御出宿ニ而雅談申承り、○百四拾八文落雁、先生へ為土産、九ツ時止宿ニ帰り支度いたし、隣座敷之僧常陸之もの由、昨夜一座位いたし酒ヲ呑合、○百拾六文三人割、○百拾六文油紙貳枚、○四百四拾八文桐油沓ツ、八ツ時分ヲ立出、○廿八文わらんじ沓足、廿四文上同断沓足種之助へ可遣与買之、七ツ時分平尾ニ至り太田屋ニ止宿、太田ケ谷之もの老人来り同宿、夜ニ入加劔御家中之御供之人々隣座敷ニ而博突いたし、やかましく、此方ニ而酒ヲ為出、凡六合、肴式筋斗り飲食いたし、まぎれて禰ぬ。〔赤字〕貳百文崎玉屋止宿料

\* 平 尾 —— 現稲城市平尾カ

三月廿三日、雲天、昼々晴天、四ツ時分北風吹出テ暖気也、五ツ時分立出、○貳百文旅籠代、○百文酒割合、途中三度休々、○廿三文三人割、○八拾四文屋喰、○三百文川越町勘ニ而酒肴代、今日八

近世後期の名主日記について(小暮)

ツ時分川越着、別レ之酒宴旁ニ而、紺屋カ日暮、夜ニ入五ツ時分帰宅、○百文菓子

遣ヒ錢沓貫七百三拾五文、(以下朱書)外ニ○貳百文付落分、残り金沓分式朱ト錢百五拾四文

三月廿四日、改金沓兩沓分ト錢百九拾四文、九ツ時分ヲ立出、菖蒲へ行、粕谷善太夫同伴、桶川宿迄長八出迎ニ出居同道、七ツ時分迄道中かたり漸着、途中入用○百文太郎右衛門舟場へ遣ス、○八拾六文茶代其外、□金式分堀部氏召仕之ものへ為土産遣ス、○三百文仲人国崎小右衛門へ酒代、今夜堀部氏宅ニ止宿

\* 太郎右衛門舟場 —— 太郎右衛門の渡し、足立郡川田谷(現桶川市)と比企

郡三保谷(現川島町)とを結ぶ荒川の渡船場

\* 堀部氏 —— 堀部儀兵衛・菖蒲の名主、息子の堀部善太郎の妻に信海長女さたが嫁ぐ、この時の仲人が国崎小右衛門。

三月廿五日、昨夜中カ大雨、今昼カヤミ曇、今日右雨天ニ付逗留、酒宴堀部儀兵衛俸市太郎与戯ニ将基杯さして日暮

三月廿六日、五ツ時分堀部氏宅ヲ出立、南村須田氏酒蔵へ長八ヲ尋、酒被振舞、桶川宿粕屋ニ而昼喰、○金式朱、今八ツ半頃帰宅、主従五人也、但シ藤右衛門廿三日ニ堀部氏娘てふヲ送り行居ハ同道也、○金沓分参宮留守見舞、残り金沓分式朱ト錢九拾貳文



遣ヒ金貳分式朱ト錢百文、外ニ三百八拾六文者藤右衛門持合、算勘式文不足

\*南 村——現上尾市南

\*須田氏——須田治兵衛、紅花間屋須田大八郎家の本家

四月三日、朝飯後々坂戸へ行道、一寸石井村井上氏本家へ立寄、九ツ時分坂戸へ着、□金貳分ト錢六百廿八文穀清ヲ受取、夫々上方へ行、間坂屋弥兵衛方ニ而、○廿八文温飩貳ツ、○百文せんべい・今坂、□廿五文秋山々大麦代残り受取、□金貳分ト錢貳百廿四文灰代三駄分、政右衛門ヲ受取、○百四拾八文せんべい、夫々太郎次方へ立寄、鞆ヲ預ケ鉢鐘ヲ拵置キ、来八日ニ金ヲ持參相渡ス筈、但シ鑛料也、○五百拾貳文白足袋貳足、○貳百廿文広紙壹枚、○三百六拾四文広壹帖十枚物二枚、帰り路ニ茂又井上氏本家へ立寄、古道具売残り之事杯及申談キ而、七ツ時分帰宅  
残り金壹両壹分ト錢五百八拾八文、遣ヒ錢壹貫四百文、持出し金壹分式朱ト錢三百文、改持金壹分式朱ト錢四百八拾八文、算勘壹文不足

\*温 鮎——うどんのこと

\*今 坂——今坂餅、餠を包んだ小判形、腰高形の餅

\*鉢 鐘——鞆の先、こじり

四月十三日、坂戸へ行、穀清ニ而金五両かり、但シ拾両かり申度旨及申談置キ処、都合悪敷由、誠金饑饉<sup>(地)</sup>与歟、融通無之、困り入存キ、○百文もち、夫々太郎次方へ立寄、金壹匁外ニ松桜梅<sup>(ヤ)</sup>之かなもの壹ツ預ケル、是者鞆之さぐりニ付呉キ様申与頼キ、○貳百文麻七拾匁、○六拾文竹縄四房、掃路石井多藏方へ立寄、酒被振舞、又同所佐文次方へ立寄、夕方ニ帰宅

残り金壹分式朱ト錢百九文、内百文十四日朝出ス、錢壹貫文也、四月廿九日朝入、錢三百丁五拾文

\*さぐり——刀、脇差の鞆につける鏝のような形のもの

四月二十九日、川越へ私用ニ而行、但シ戸崎山壳木一件ニ付、当月故障人有之、御□方様之以御精々相濟、右御礼、其外右掛り合之ものへ為礼進物持參、紺屋村良助方へ立寄、為礼物広紙貳枚為進物、茶之馳走ニ成リ 四ツ半頃寺山ニ至リ、○廿五文団子、三田姥宅休ミ、○三拾式文半紙、小川入出来壹状、○四百三拾七文半紙拾五状、○百四拾八文粘入四拾八文、<sup>(枚カ)</sup>○三拾式文水引小把壹、以上三品代、合六百廿壹文、此分金貳朱渡シ、返り百八拾七文受取、夫々南町三之助方へ立寄、鶏卵廿五為進物礼角麻喜買物、○貳百六拾八文三百目釘五拾本、○六拾八文屋根釘代先日之分拾六本代、○百文針かね代先日かり分不残払、○貳百文切壹番式本、髮結之遣ふ油壹枚、○貳百四拾八文手綱壹筋、但シそめ中物也、<sup>(架)</sup>○三拾式文釘壹包、

○廿四文白雪香菓子、夫々本町改熊右衛門方へ立寄、半紙五状為禮物遣ス、○貳百文三臈円勝次ニ被頼<sup>レ</sup>□□、熊右衛門方申<sup>レ</sup>者、御趣意ニ付、如此品者御費不申旨、兼而被相断居<sup>レ</sup>間、御氣之毒ニ者存<sup>レ</sup>共、御返し申<sup>レ</sup>与申之ニ付、先ッ受取持、追而御礼ニ上リ可申与申聞、夫々多賀町種屋へ立寄、牛房<sup>(考)</sup>たね八夕計り返し、□百七拾貳文取、西丁裏桑原様へ鶏卵五十為御礼差上ケ、夫々<sup>田嶋新田新井</sup>様へ上リ御断申し上、蓮門前文右衛門方へ立寄、おしきり<sup>(押切)</sup>先かけ相頼、○百貳拾四文わきはりかけかね<sup>貳</sup>かけ、○百八拾文屋喰酒壹合肴代、○七拾八文半紙取替、打錢今日桑原様々新井様へ上リ<sup>節</sup>、雷氣雨天之処、夕方又雷氣東々西南廻り雨天ニ付、無抛石原町大黒屋ニ至り止宿、夕暮方大降り、今夜松山町之ものと同宿之処、品川宿近所中野与言所之日蓮宗之僧来り同宿、今九ツ時分迄大雨降

\*寺 山——現川越市寺山

\*田嶋新田——現川越市南・北田嶋カ

\*押 切——飼葉切の道具、先かけはその刃先を磨ぐこと

四月晦日、晴天、○百七拾貳文旅籠代、○四拾文酒肴代三人割合、○貳百文、三月七日屋喰三人分私、此分金壹分渡シ、返り貳朱ト四百三拾六文取、今日茂町へ行、北町扇屋伊介ニ而、○八拾文網魚貳把、下町ニ而酒、○四拾四文、五ヶ村吉野屋清右衛門方傘之柄直代、○四拾八文、夫々伊草渡<sup>\*</sup>シニ出テ同所ニ而髪ヲ結、四ツ時分帰宅、

近世後期の名主日記について(小暮)

○百文せんべい

出遣ヒ錢貳貫八百拾六文、外ニ百文、残り金貳朱ト錢貳百三拾四文、算勘合、持出し金壹分貳朱ト錢壹貫三百丁五拾文、入錢百拾貳文<sup>(考)</sup>牛房種返し

\*伊草渡し——比企郡伊草宿(現川島町)と入間郡福田村(現川越市)とを結ぶ渡船場、川越松山道の渡しで、入間川と越辺川の合流点付近に設けられた。

五月三日、錢三百文入、四月晦日夕金三分之入、内四百文五月六日夕、仁平へかし、改持金、三分貳朱ト錢八拾七文有之<sup>レ</sup>、五月六日夕改、

五月十四日 改金壹分貳朱ト錢三百三拾文

五月廿五日、改金貳分ト錢三百四拾八文持出し

五月廿六日、八ツ時分出宅、鎌形村長嶋氏へ行、奥田村ニ至り主ニ逢休息、夕暮ニめさす所ニ至り止宿、今夜中九ツ時過迄雨天

\*鎌形村——現嵐山町鎌形長嶋家は信海妻銀子の実家

\*奥田村——現鳩山町奥田

五月廿七日、曇、小降、五ツ時分出立ニ而九ツ時分過帰宅、○廿

四文舟賃、嶋田渡し幸次へ酒代遣ス

\*嶋田渡し——入間郡島田村(現坂戸市)と比企郡毛塚村(現東松山市)を結ぶ越辺川の渡船場、現島田橋あたりカ

六月八日、坂戸へ行、穀清ニ而金貳両也米代之内かり、○四拾五文まんちう十五、豊忠ニ而米代之内金貳両也かり、○百文今坂ひめ子、○百四拾文なほ酒五合、

今日持出し金貳朱ト錢五百五拾貳文、遣ヒ錢貳百八拾五文、残り錢貳百六拾七文

\*ひめ子——今坂餅の商品名称

\*なほ酒——直酒、腐敗しかけた酒、または下等な酒などに加工して、普通の酒と同様な香味をもたせた酒

(△印朱書)  
△六月九日、川越へ五拾人御講ニ付、掛金寄不足ニ付無抛出勤、  
◎三百文馬尻こさくつこ并ひも代下小坂武兵衛へ払、○貳百廿四文  
□貳百文馬飼者桶貳ツ、○八百廿四文塩貳俵、此分金壹分遣シ、つり錢三百七拾貳文受取、九ツ時分川越着也、蓮門前鍛冶屋文右衛門方へ立寄、○四百四拾文おし切先かけ代払、夫々同門前相模屋へ行歌書ヲ返ス、○百文白砂糖、○拾六文砥かけ壹ツ、□北町万忠ニ而穀代之内、金壹両かり、○貳百拾六文石井分かんざし打直し代、□金九兩貳分御講へ奉掛、御つり四百九文奉請取、○六百文如定例被

下ひ弁当代之内、戸右衛門・勝次郎兩人へ渡ス、○八拾文三河屋屋喰代、○貳百拾六文切元ゆひ四把・もくさ二品代、○貳百六拾八文つまをり笠壹かい、○貳百四拾文大判ふのり一枚、鼠半切九十枚ツツ二ツ、○四拾文文黒大豆三合、○百文塩竈菓子壹包、○百廿八文なお酒貳合、八十文上酒壹合、豆腐、○百文白砂糖下小坂ニ而、夕方帰宅

(遣ヒ)出金九兩壹分朱ト錢四貫五百四拾壹文、持出し金拾兩ト錢壹貫七百六拾七文、算勘廿八文過)残り有金壹兩貳朱ト錢五百六文、(朱書)  
(内金貳分、十日朝内ニ置、出宅)

\*五拾人講——一種の無尽式積金制度で窮民対策・藩財政援助も兼ねていた。

\*馬尻こさくつこ——くつこ(口籠)は馬の口にはめるかごのこと  
\*つまおり笠——端折・菅笠の一つ、端を折り曲げたもの

六月十日、又川越へ出勤、昨日、五拾人御講御鬮当り、金子受取四郎兵衛同道、五ツ時分宿出立、四ツ時川越着、○廿四文物、茂鱸つりはり四本、○百拾貳本酒肴代、北町三河屋ニ至リ、七ツ時分迄居金子奉請取、十六会目ニ而金五拾七兩貳分也、○貳百文茶代三河屋遣ス、○四百文屋喰兩人分、○百拾六文冷麦四ツ、酒貳合、○廿四文木之しやくし壹本、○三拾貳文草鞋壹足、往反共小坂通り、夕暮ニ帰宅

出遣ヒ錢九百拾貳文、入金壹兩、昨九日北町万忠ニ而米代金貳分

之内ニ置<sub>レ</sub>而、右之外、昨日分出遣ヒ残り共今朝持出し金貳分貳朱ト錢五百文也、残り金貳分ト錢四百六文、算勘合以下朱書

\*物茂鱧つりはり——物茂は釣針の商品名カ、小遣帳には「物茂つりはり」とある。

\*十六会目——五拾人講は年三回、都合五〇会目が満会となる。

六月十二日、御呼出しニ付出勤、戸右衛門同道、伊草通り、四ツ半頃川越着、改高橋屋ニ而昼喰、酒代〇貳百七拾貳文、但シ酒壹合、四ツ時ニ御役所へ出テ七ツ半頃御用済、青木村名主ヲ頼ミ置、石原ニ至リ大黒屋ニ止宿、是者我等風邪、戸右衛門膝病ニ付止宿ニ成ル、〇四拾文酒代

\*青木村——現坂戸市青木、青木村名主左右衛門

六月十三日、曇、雨少々降、〇三百六拾四文大黒屋へ旅籠代、兩人分払、〇廿四文髮結錢、〇百拾六文片栗の粉壹合、夫々御役所へ出テ<sub>レ</sub>処、今日者御免勸化錢掛リ御役人、御出勤無之ニ付納かね<sub>レ</sub>南町山田屋へ立寄、去年通ヒ金払、残り金六兩貳朱ト錢六百九拾三文払、〇九拾文足四寸釘一把、〇八拾文昼喰、〇百八文墨壹丁、〇丁五拾文蚊針五本、〇四拾八文飴、〇八文梨子壹ツ、〇三拾貳文草鞋壹足、七ツ時帰宅

〇残り金壹兩三分也、錢四百八拾貳文、〇遣ヒ錢壹貫九百四拾九

近世後期の名主日記について(小暮)

文、〇同金六兩貳朱也、持出し金八兩ト錢八百六文、改持金壹兩三分ト錢貳百七拾六文、内金壹分青木無<sub>レ</sub>へかけ、三拾壹文取、右六月廿一日夜記之

六月廿六日、晴天、南風吹、冷氣昨日与異也、川越へ出勤、父退役願、父同役源右衛門同道、寺山々嶋田半十郎同伴ニ成リ、江戸町菅野屋ニ而酒肴飯代、◎九百五拾六文、但シ外ニ定右衛門俸判掛リニ而同伴、都合四人ニ而食之、〇四拾八文御溜リ茶代兩人分、〇三百文酒切手札一枚江戸町次原ニ而、御役所九ツ時々八ツ過迄かかり、父退役願書源右衛門へ御戻しニ相成ル、其節存寄茂可有之も与仰之由、江戸町菅野屋払源右衛門出ス、溜リ茶代已出ス、江戸町表一済へ酒札為進物、夫々改高橋屋へ行、光勝寺住僧光学与酒呑合、但シ先刻菅野屋ニ而右光学へ酒振舞<sub>レ</sub>故、代ニ不構其座ヲ立、夫々塚町八百喜へ立寄、〇壹貫貳百四拾八文酒札五枚代已出ス、六軒町裏原田・渡辺兩所様御宅へ上リ、渡辺様者宗門帳一件、原田様者御用有之由依仰參上也、是者村入用、渡辺様者宗旨帳之掛リ也、八百喜へ金壹分渡シ、つり錢三百七拾貳文取、夫々御宅三軒へ上リ、石原ニ至リ大黒屋ニ止宿

\*江戸町——現川越市松江町二丁目、大手町

\*一 済——沼田一済、父は検校・藩医、一済も医者で、信海と歌の面で親交がある。

\*光勝寺——赤尾にある新義直言宗寺院、石井村大智寺末で明王山と号す。

\*堺 町——川越妙養寺門前の通りと六軒通りの間、現末広町一丁目辺り

\*六軒町——現川越市六軒町

六月廿七日、今朝改金壹兩ト錢壹貫百四拾七文有之、是者持出し金壹兩貳分ニ付式朱不足歟与思故、算勘之節之ため覺置<sup>カ</sup>、朝食後妙正寺下、小川・古川両宅へ参上仕、小川様へ源右衛門ヲ退役之義申上、○五百文酒札式枚堺町八百喜へ<sup>カ</sup>已出し置<sup>カ</sup>、夫々田嶋新田、新井・石川両御宅へ上り、○貳百四拾文西丁高麗屋<sup>(町カ)</sup>ニ而酒札壹枚代已出し置<sup>カ</sup>、○百拾貳文酒肴代、鍛冶町ニ而前高麗屋之酒札石ケ谷様へ上ル、○貳百七拾八文胡麻いり壹ツ、○貳百五文そうめん、紙水引代熊野屋弥平次へ<sup>入のみ朱書</sup>已出し置<sup>カ</sup>、○百文三黄散北町酢屋<sup>入のみ朱書</sup>ニ而<sup>入のみ朱書</sup>百六拾文米代之内金壹兩かり、残り錢北町万忠<sup>入のみ朱書</sup>ヲ受取、<sup>入のみ朱書</sup>金貳分ト錢壹貫貳百三拾三文、大豆代金北町近藤<sup>入のみ朱書</sup>ヲ受取、○百八拾文麻糸貳房、○六文<sup>入のみ朱書</sup>砥石壹ツ、○廿四文笠アテ壹ツ、同所加賀屋源八へ<sup>入のみ朱書</sup>百七拾貳文志やうちう五合、○貳百六拾四文酒肴代、高沢町丸水屋へ<sup>入のみ朱書</sup>百、○貳百文菓子、高沢小見屋市右衛門方ニ而、○三拾六文昼喰、○三百六拾文、昨夜止宿料兩人分已出し置<sup>カ</sup>、○四拾貳文紺屋ニ而休ミ已出ス、是者二ツ割ニ者いたす間敷<sup>カ</sup>、所々の舟場ニ而休ミ、八ツ半頃帰宅

残り金壹兩壹分式朱ト錢六百廿五文、入金貳分ト錢壹貫四百三文、

出遣ヒ四貫三百四拾三文、算勘四拾文過<sup>(朱書)</sup>、壹兩三分式朱ト<sup>(朱書)</sup>錢壹貫六百七拾六文<sup>(朱書)</sup>入金合

\*三黄散——醉の名称カ、但シ小遣帳に「三黄散三匁」とあり、粉末で薬に使用したものか

六月廿八日、入錢五百文、改金壹兩壹分式朱ト錢壹貫百四拾四文  
六月廿九日、坂戸へ行、穀清へ立寄、当四月十三日借用金五兩返ス、主人留守、内方へ渡ス、奥蔵者山へ木切ニ行<sup>カ</sup>由、内方姪与外者人機おり居、三人へ渡し、後日立寄利足旁々御来社可申間宜敷ト申置<sup>カ</sup>、夫々太郎次方へ立寄、同人倅常吉ニ聞、穀清方機おり居<sup>カ</sup>女者姪之姉ニ而、是迄江戸ニ奉公いたし居<sup>カ</sup>由、○五拾文竹繩三房、○百文針かね廿五匁、掃路ニ石井井上氏へ立寄、種々之事及申談、同本家佐文次方へ同伴ニ而行、此家身上向之事及申談、何レ盆中上川上村八木原氏へ佐文次行、此段示談之上之事与申合、夕方帰宅

\*上川上村——現熊谷市上川上

七月四日、川越へ出勤、暑中御見舞外伝次郎一条、郷御目付山川様へ<sup>(朱書)</sup>申上、○七拾文西之内紙拾枚、水引二十本、○四拾八文御溜り茶代以上二筆者源右衛門出ス、九ツ時時過、下松郷町ニ至リ丹後屋ニ而<sup>(朱書)</sup>昼喰酒肴代、○六百三拾六文、夫々御宅廻リ、堺町八百喜へ至リ、○百

四拾文酒壹合、水菓子二色、石原ニ至ル頃、家々ニ燈火つけたり

●廿六文色紙拾三枚(十のみ朱書)⊕四拾八文ろうそく式丁、間忠ニ而提灯かり、

○百文壹文落雁、小坂店ニ至リ提灯つけ○百文白砂糖、五ツ半頃村

ニ入、伝次郎一件相済ハ跡へ組合之もの并仲扱人共立会、飲酒之様

子ニ付、源右衛門事金右衛門ヲ呼出し申談旁手間とれ、四ツ時少し

前帰宅、○印(十のみ朱書)、赤キ分四筆、源右衛門出銭割合もの、⊕印(十のみ朱書)壹筆者己

出銭割合もの

遣ヒ銭合式百七拾四文、同百五拾壹文坂戸ニ而、改金壹兩壹分式

朱ト銭四百拾四文七月五日夕改

\*下松郷町——現川越市下松江町

\*伝次郎一件——赤尾村内で博奕催しにつき、関係者が入牢申し付けられた事件・入牢一件ともある。

△七月六日、坂戸へ行、豊忠へ立寄、是迄米、大豆代金内かり惣差引、かりニ成ハ分渡し、通ニ為付相済申ハ、○百八拾九文前書かり

銭渡ス○式百文黒砂糖、目方□□○百拾八文昼喰酒代○廿文髮結

代、穀清ハ米代内かり残り銭六百四拾六文受取、夫ハ戸口村網屋へ

行、主人初対面茶并菓子馳走ニ成ル、茶好之由、三種之茶ヲ銘々言

之煎し出し振舞ハ、網ヲ為出見覽之処、い者形あしく不買、夫ハ嶋

田村藤四郎宅へ立寄、此家ニ而茂茶菓子被振舞、とりはやされハ事、

是先祖之余光難有事与忝存ハ、藤四郎方ニ者網壹反も無之由、八ツ

半頃帰宅、

遣銭五百三拾壹文、但シ入銭六百四拾六文、残り金壹兩貳朱ト銭

貳貫三百五拾貳文、内銭壹貫貳百五拾貳文銭箱ニ入、算勘百貳文過

ル、改金壹分式朱ト銭壹貫文、七月廿三日改

\*戸口村——現坂戸市戸口

△八月朔日、川越へ出勤、御手代小林半五様御宅へ御召ニ付参上、

五ツ半過着、通丁ニ至リ御用印返上仕ハ、御用之趣今一度万歳ヲ天

沼へ遣し可申与之御意、鍛冶町えの屋ニ而、○式百文白糖、南町山

善へ立寄白木綿壹反返し、同反物式反買之、通ニ為付反物受取持来

リ、○百五拾貳文和市屋昼喰酒代なおし壹合、なまり二切、いも一

井□金壹兩ト銭四拾四文北町万忠ハ米代受取、○貳百文太元ゆひ二

番式本四把、○三拾貳文金平糊式包、○七拾貳文大判(んか)ふのり壹枚、

○三拾貳文火打石、坪糸、○七拾六文かくてん四本、往反共小坂通

リ、八ツ半頃帰宅

出遣ヒ銭七百七拾貳文、残り金壹兩壹分式朱ト銭貳百六拾七文算

勘壹文不足、入金壹兩ト銭四拾四文、改持金壹兩壹分式朱ト銭貳百

廿八文

△八月三日、川越出勤、御林一条ニ而六軒町裏原田様御宅へ上ル○

四拾五文ひめ子(お)もち十五、夫ハ通丁ニ至リ小林様者御出勤御留守ニ

付、御役所へ出テ権右衛門儀ニ付御届ケ申上、今日ハ十日尋ニ被仰付、小林様未御役所へ御出無之、戸塚様ニ御目ニかかり遂一奉申上、小林へ可申次、何レ後日又々申聞儀可有之与之御申聞ニ有之、九ツ過江戸町ニ出テ、○百拾貳文高橋屋ニ而昼喰酒代、○貳百五拾文、大五寸釘壹把、此分ニ金壹分遣し、外ニ拾六文うち百錢十四枚受取、石原ニ出テ小坂通り栗原氏へ立寄、川越へ出勤留守ニ付不逢、小沼きそめん通り往反共いたす、七ツ前帰宅、改残り金壹兩貳朱ト錢壹貫四百五拾壹文

出遣ヒ錢四百壹文、内錢九百文金箱へ入、金貳朱、一件入用金遣ヒ不足ニ付足シ、同三分金箱ニ入、右八月八日改之、内金壹分ト錢四百文尊母君へ八月十九日上ル

八月十五日、坂戸へ行、穀清ニ而壹兩貳朱ト錢壹貫四百四拾六文米代受取、○貳百拾六文いん鍬壹丁、○八拾八文笠壹かい、○三拾文笠わ五ツ、○七百廿八文笠七かい此わ無之、只貳ツ付、故内錢拾六文返ル往反共片柳番申道通り夕暮ニ帰ル、  
残り有金三兩壹分貳朱ト錢壹貫五百四拾三文、持出し錢百五拾壹文、算勘八拾四文過、改持金壹分ト錢六百四拾貳文、八月十六日、夜右之外金貳分貳朱、八年十月十七日朝入

牛 柳——現坂戸市片柳

八月十七日、当秋入牢人一件御呼出しニ付、掛り合一同川越へ參ル、源右衛門、戸右衛門、平藏等出勤、外掛り合も拾九人計リ、親類共乍見舞ニ同道、小坂通り九ツ時分川越着、○百八拾四文半紙五状代一件入用也、九ツ半過御役所へ出、面付差上七ツ半頃、御白砂へ出、依之夜ニ入、入貳百文定付へ切手貫之節遣ス己立替出ス、五ツ時分御城ヲ出テ御牢屋敷へ行、又御城内へ入御繩御返上之上、本町榎木氏へ立寄、今宵止宿ス、○貳拾四文蠟燭壹丁、御繩御返上之節入用、

\*入牢人一件——前記の伝次郎一件のこと

八月十八日、朝榎木氏へ昨昼々之飯代金壹兩ト錢四拾八文皆々割合勘定之上払(○印朱書)内七百五文代五郎立替己払置、此分金貳朱出し返り錢百七文受取、□金貳朱、牢扶持錢甚右衛門へ時かし、夫々金右衛門同道牢屋前へ行、御牢番中嶋惣右衛門方へ立寄、金三分渡し、○百四拾文銅板目方五匁、○四拾八文刷毛一挺○拾貳文大針壹本、○四拾貳文筆式本、高沢町近興方ニ而、今七ツ半頃帰宅、帰路者十人同道也、高沢町有馬屋三次方へ立寄、酒・冷麦代錢壹貫百八拾六文かかる、佐平、團八兩人ニ而出し置

遣ヒ錢壹貫百六拾三文、残り金貳分貳朱ト錢貳百八拾八文、八月廿日改

八月廿日、入牢一件御召出しニ付出勤、例之もの拾五六人同道、中小坂村栗原氏へ立寄<sub>レ</sub>処、主人坂戸へ行留守、間合<sub>レ</sub>木挽之義此村ニ而者御役所へ申上<sub>レ</sub>処、村役人差添早速出府いたすべく与被仰付、依之昨日百姓代同伴出府之由、九ツ時御役所へ御届ケ申上<sub>レ</sub>得共、例之ゆるし之思召待侘居、七ツ時分御召出し御白砂ニおいて口書被仰付、又御郡代所へ当人村役人御呼出し、印形御取、夫々又待居<sub>レ</sub>処、夜ニ入五ツ時分御召出し、不残御免、過料錢夫々被仰付、右御受書榎本引取<sub>レ</sub>上認之四ツ過ニ奉差上<sub>レ</sub>、此度者如何之事ニ而明日迄御猶予不被成下<sub>レ</sub>哉、当春同一件之節与者違申<sub>レ</sub>事、今夜榎本ニ而皆々祝い酒飲之、其上過料錢之相談、甚右衛門親類不落合ヲ彼是申談、旁深更ニ成り、八ツ時分皆々寝ル、

八月廿一日、晴天ニ成ル、尤昨終日雨天、皆々難渋之処、今朝者一件者御免ニ成り、旁心茂快晴たるへし、只昨日之入用并過料錢之事計り者心ニ<sub>(か脱之)</sub>かるへしと己もおもいやる也、北町万忠大豆代□金壹両壹分ト錢壹貫百丁五拾文受取、○百丁五拾文銅板半枚、○貳百三拾壹文六分、丸のミ壹丁、夫々御役所へ出、日限十日尋ニ被仰付之過料錢御上納、通町通り廻勤石ヶ谷様へ御届書上ケ御留守也、江戸町渡辺様まわたかけ代、○貳百文内百拾六文石井分、榎本氏へ立寄<sub>(返ルのみ朱書)</sub>返ル金貳朱之茶代立替出ス、其外過料錢茂立替出ス、此改帰宅之上取調可申<sub>レ</sub>事、榎本主人々旅籠食代是非ニ今日差置可被掃与之談ニ付、当年番百姓代文七与申談之上、明日寄合取集メ、明後廿三日

近世後期の名主日記について(小暮)

昼迄ニ為持遣し可申与之対談いたし、石原ニ而皆々与一所ニ成り、下小坂武兵衛方ニ而提灯かり出四拾八文蠟燭式丁出三拾式文同式丁、道あしく大難渋いたし、五ツ半頃帰宅、□金貳朱、榎本氏へ茶代被返受取来り、入金壹両壹分式朱ト錢壹貫九百拾九文雜用内取、入金壹両壹分ト錢壹貫百丁五拾文大豆代取、出合金壹分式朱ト錢拾三貫三百六拾文過料錢上納、残り金三分式朱ト錢壹貫七百九拾式文、持出し金貳分式朱ト錢貳百八拾八文、遣ヒ錢六百六拾五文、残り錢五百三拾六文、戸右衛門、勝次郎兩人へ預ケ、改持金三分式朱ト錢七百九拾式文、

八月廿三日、昼々坂戸へ行、豊忠ニ而米代之内金壹両かり、穀清ニ而金三兩時かり□金壹両貳朱ト六百廿七文米代金受取、○四拾八文今坂もち、七ツ時分帰宅、往反共片柳裏田中道通り、改金三分式朱ト錢壹貫三百七拾壹文、内六百文錢箱入、<sub>(以下朱書)</sub>内壹分式朱金箱入

八月二九日、石井村大智寺へ參ル、茶并白瓜、黄瓜為土産、昼喰之馳走ニ成り、<sub>(文字)</sub>日ニ方丈一寸御光来ニ而御談有之<sub>(文字)</sub>金子式拾五兩預り可申与申談、今日受取、但シ金五拾兩預り呉<sub>レ</sub>様預御談<sub>レ</sub>得共前書其半数預<sub>レ</sub>、利者一割之究メ、預証文追而遣シ可申<sub>レ</sub>、方丈へ申上<sub>レ</sub>事

<sub>(甲朱書)</sub>△八月晦日 川越へ出勤、権次郎十日御日切之三度度目也、五ツ時



出宅、尊母君御同伴、下寺山、中野氏へ妹るい病氣為御見舞御出也、

○百廿四文麻表草履壹足、○壹貫五百文石原志とやへ払、○百文馬方へ遣ス、北町近藤殿一寸立寄、や起魚少々為進物、夫々御役所へ

出ルハツ半過相済、○金貳分・高沢八百又へ渡ス、渡シ金共都合金壹兩相渡し事、此暮ニ差引勘定ニいたし可申、持出シ金貳拾五兩三分ト錢七百五拾九文、○百四拾文昼喰代、溜リニ而待久しく、一寸昼喰ニ町へ出、南町山田屋ニ而買物三品調之、和市屋ニ而昼喰

いたし、又御役所へ出テ、前書之刻限ニ相済、又町へ出ル、○金貳朱、一角目方五歩、北町酢屋ニ而買之、下寺山中野氏之妹ニ遣ス○百文麻糸三拾六くれ○三拾貳文山葵貳本、下小坂店へ立寄、先日かり白黒砂糖并鹿紙三ヶ代合八百六拾四文払、受取書取置、但シ八月十六日也○百八拾貳文、黒砂糖貳百目○三拾貳文蠟燭貳丁、同店ニ而買之代払、此分ニ金壹分遣し、つり五百三拾八文取、中小坂村

柴原七郎兵衛方へ立寄、提灯かり小沼村法音寺与同道、同寺東側道通り、同夜五ツ半頃帰宅、○貳百文、壹文落雁二袋、壹袋者下寺山中野氏へ土産とす

残り金三兩ト錢九百壹文、内拾貳文九月朔日賄馬方取、遣ヒ出

金貳分貳朱ト錢三貫貳百八拾貳文、出金貳拾壹兩貳分ト錢六百四拾八文、北町近藤へ借払、改持金壹兩ト錢九百壹文、右算勘合

\* 中野氏——入間郡下寺山村中野佐十郎鎮政、信海の妹るいの夫

\* 一角——おこり病(発熱)の菓名

\* 小沼村法音寺——新義真言宗寺院

九月六日、石井村井上氏本家并分家多藏方へ行、扇町屋借金一条及申談、○四百六文土屋作右衛門へ酒三升代払、七ツ過帰宅、尤明七日書面認メ返答有之筈、

\* 土屋作左衛門——石井村の酒屋カ

九月八日、坂戸へ行べく与支度いたし、石井多藏来り、同人本家之事示談有之、旁ニ而行不申、

九月十一日、坂戸へ行、川ヲ乍網打上り行、田木渡し場仕舞、心さす所ニ九ツ時分着、穀清へ立寄、□金貳分貳朱ト錢七百五拾貳文受取、豊忠ニ而、□金貳朱ト錢五百文受取、夫々角權へ行昼喰、

○百拾貳文、飯三椀、肴一切、酒壹合、夫々太郎次へ立寄、○三拾文麻糸壹房、○百九拾五文鯉節貳本、掃り路石井村大智寺へ立寄、方丈ニ面談、先日之預リ金証文相渡し、同村多藏方へ立寄、主人留

守、古河へ今朝参リ由、八ツ時分帰宅  
遣ヒ錢七百四拾九文、入持金壹兩三分ト錢壹貫四百壹文内六百文

錢箱入、右九月十一日夕方改之、算勘三文不足、改持金壹兩三分ト錢八百壹文改錢八拾四文

\* 田木渡し場——田木村は現東松山市田木、高麗川、越辺川合流地の越辺川上流あたりの渡し場カ

\* 古河——栃木県古河

九月廿三日、坂戸へ行、昼々出宅、石井村通り、所々桜紅葉して、家々の軒近き色を、やとかりて里のふせ屋に一夜ねん紅葉のにしきふすまにはきて、右是迄者此冊をきせし事なかりしかと、今ふ心にうかひたるまゝかいつゝるなん。○百三拾式文角屋昼喰式膳、味淋壹合代、□錢壹貫三百五拾六文、灰壹駄代政右衛門受取、夫々同所太郎次方へ立寄、○三百文黒砂糖三百拾式匁、○百文白砂糖五拾五匁、主人咄し、片柳村三十番神飯盛大明神之檜木拙者<sup>セ</sup>話いたし、式本也、柏原村増田左内を為買由、凡拾五度程片柳村へ行、漸相談出来、式本を而金百五匁を而伐取を成り、尤今日小沼村表迄飯盛川ヲ流し行、己来路を見覽を付咄し入、凡金拾五匁与之積り之処、金五匁を而たり可申与之咄し、其木壹本者壹丈式寸廻り、壹本者九尺五寸廻り之由、残り壹本者七尺五寸廻り之由、節多く且ツ細キ故御本丸御用を相成兼由、○廿式文竹繩志<sup>（志カ）</sup>入壹房、○拾六文鹿紙式帖、一帖六枚ツツ有之由、但シ葵入紙也、帰路石井村に至り中山村のもの坂戸へ行帰りと同伴聞之、早稲毛之有稻之由、五斗九升を売由、今日相場、上米五斗八升、下米六斗三升迄之由、同村多蔵方へ立寄、○金貳分之恰野集拾貳冊代渡ス、右集受取持帰ル、七ツ頃夕暮迄歌物語久々を而いたし、心をやりり、六ツ時帰宅、

近世後期の名主日記について(小暮)

金壹両壹分下錢八百七拾壹文、出遣と錢五百七拾文、入錢壹貫三百五拾六文、算勘壹文過、改金壹両壹分下錢六百八拾三文

\* 柏原村——現川越市柏原

\* 飯盛川——越辺川支流、島田・石井間の水田地帯を流れる。

\* 恰野集——歌集・清原雄風編による。別に掌中恰野集がある。

十月五日、御定免受之義を付未明出宅、下寺山村へ行、四ツ時分右之一条濱、川越へ行、沼田一濱方へ立寄、小作検見之事及申談、夫々南町を出、和一屋昼喰、○百文角間忠を而、○銀四匁五分、八分紙拾状、此錢四百八拾四文、金式朱遣し、つり三百廿四文取、○拾式文色紙○三拾式文筆壹本、○六拾八文ひんかかみ、○廿五文かき四ツ、○廿八文かき七ツ、○三拾式文章鞋壹足、○五文柿壹ツ、夫々下寺山中野氏へ立寄、○貳百文壹文菓子壹袋、壺<sup>（髮鏡カ）</sup>壹包、此内壹文菓子壹袋為土産、七ツ半頃迄酒ヲ被振舞居、帰路を趣、紺屋村東道ヲ通り、夜に入帰宅

\* 壺——菓子 of 名称

十月六日、早朝出宅、又下寺山村へ行、八人連を而其村名主平内宅へ皆行、御受書奉差上、四ツ時分其村へ帰路を趣、○四百文仁平次へ渡ス、五拾人御講掛金十一月下旬迄延御願ヲ御宅へ承り遣

ス、且又、明日榎本寄合兼、今夜川越止宿也、○百文下小坂村ニ而皆之休ミ之節、源右衛門与百文ツツ出ス、八ッ過ニ帰宅

出遣ヒ共錢壹貫四百九拾五文、残り金壹兩貳朱、算勘合、十月六日夕改、(以下朱書)錢百八拾八文十月八日入

十月廿四日、雨天ニ川越へ出勤、御代官所ヲ御召状昨日拜見、小坂通り栗原氏へ立寄、川海苔五枚為土産、下小坂武兵衛店へ立寄、当月下男孫平ニ魚油為買ハ節、不足錢かり有之ヲ払、○百文前書之錢、四ッ時分着、下町柳屋平吉へかんとくり壹ッ預ケ、北町万忠へ立寄□金壹兩壹分ト六百六拾八文受取、○貳百文昼喰、酒代、○金貳朱ト錢三百五拾四文高沢町麻源へ払、○三拾五文品々買物、○貳百文せんべい、八ッ過ニ御役所へ出テ、七ッ半過迄例之あくひして(欠)待居、夕暮ニ村々大小惣代之もの一同御召出し、御用相濟ハ、○百文南京落雁、○百文今坂もち、南町(山田)而昼前買物いたし置ハ聞立寄、提灯かり立出ル、寺山村ヲ暗ニ成ル、わらんじ壹足、○拾六文ろうそく一丁、此店ヲ提灯つけ五ッ半過ニ帰宅

出遣ヒ錢七百七拾九文、買物其外、同断金貳朱ト錢三百五拾四文、麻源へ払、メ金貳朱ト錢壹貫百三拾七文、残り金貳兩貳朱ト金五百五拾五文、入金壹兩壹分ト六百六拾八文、米代取、算勘八文不足、廿四日夜改之

(△印朱書)  
△十月廿七日、晴天、早朝出宅、中小坂村栗原氏へ御用談有之旨申

来リ行ハ処、只今宅ヲ出、川越へ参リハ由、依之、川越迄行、六軒町辺ヲ同心町、多賀町ニ至リ、一濟ニ行逢、(沼田)暫時相咄し、夫ハ江戸町ニ至リ、高橋屋ニ而酒壹合、肴并蕎麦壹膳○八拾貳文、○百文南京落雁、高沢町麻源へ立寄、金三兩渡シ受取書取之、錢与替具ハ様頼置之、○四百四拾四文間忠買物、内美濃紙壹帖代銀壹匁五分、提灯ほろ三ッ、百文ふのり、目方七拾匁、手代惣八ヲ受取、○四拾八文松風菓子、○廿五文団子、○拾貳文海老五合、往ニ小坂、反ニ伊草通り福田村辺ヲ時雨降出テ濡々、八ッ時分帰ル  
遣ヒ錢……残り金……内貳兩金箱ニ入、残り金貳分

\*福田村——現川越市大字福田

十一月四日、坂戸へ行、穀清ニ而金三兩也米代之内かり、兩ニ六斗九升ニ売しハ、帰路ニ石井村井上氏へ立寄、昨夜届キハ扇町屋善太郎ヲ之手紙、多藏ニ茂会见、夕方迄居ハ得共相談不出来、今夕方帰宅

金貳兩也金箱ニ入

十一月五日、早朝又石井へ行、井上本家主人同伴、多藏方へ行、扇町屋金返濟之示談七ッ時分ニ調、手紙ニ為認受取帰ル、金壹分ト錢三百文、種糶三斗之代、右兩ニ六斗四升替、六合五勺摺之内錢五拾四文勘弁いたし呉ハ旨聞之、金貳朱ト錢貳百文、夜学目鏡一枚代

右之金銭多藏へ渡シ、目鏡者受取来り、終身之夜宝をいたす。改金  
壹兩貳朱ト錢百四拾八文有之

十一月十日、坂戸へ行、太郎次へうるしを而つく物三品預ケ、  
金三分ト錢四百六拾壹文穀清ヲ受取、  
金貳兩貳分ト錢貳百八拾八文  
豊忠ヲ受取、  
金壹兩壹分ト錢百七拾六文秋山ヨリ受取、  
○貳百文  
千柿六連、  
○九拾貳文昼喰、  
掃路石井井上氏へ立寄、  
多藏未婦、  
用不足空帰ル、  
但シ扇町屋金談一条也、  
八ツ時分掃宅  
金四兩貳分ト錢五百文、  
金錢箱へ入、  
残り持金壹兩貳朱ト錢貳百  
七拾七文、  
出遣ヒ錢貳百九拾貳文

●(印朱書)  
十一月十八日、川越へ私用を而參ル、北町竹川利兵衛へ立寄  
金

壹兩壹分ト錢九拾文受取、  
同町万屋忠右衛門ト  
金貳兩壹分ト錢  
壹貫三百四拾六文受取、  
近藤ト  
金三兩三分ト錢六百八拾七文受取、  
皆米代金也、  
○金貳朱ト錢四百拾文聞忠へ払、  
紙代、  
金平糖二包、  
夫ト高沢町麻源へ立寄、  
鶏卵ヲ預ケ置キ而南町和市屋昼喰、  
酒代  
○  
貳百廿四文、  
○三百文中波な<sup>種</sup>菓子寺山へ、  
○貳百文金平糖、  
□百  
廿四文すきくし、  
○廿八文はけくし壹枚、  
○六拾四文瀬戸物車貳ツ、  
高沢町麻源へ預ケ置キ品物受取、  
掃路を趣可申与立出キ短日之節、  
最早七ツ半与言人有之を付石原を至り大黒屋を止宿  
有錢改百八拾九文、  
入金七兩壹分ト錢貳貫百廿七文、  
出遣ヒ錢貳  
貫百拾八文  
○算勘貳百八拾六文不足、  
再改百壹文不足

近世後期の名主日記について(小暮)

\*中波な□——小遣帳には「中華饅頭」とある。

十一月十九日、早朝を西町表桑原孫右衛門様へ上り、  
鶏卵廿五為  
御見舞差上ケ、  
御目をかかり、  
夫ト江戸町沼田一濟方へ立寄、  
酒之  
馳走を成り、  
書物数多見之、  
平生望之黒羽屋御藏板日本書紀十六冊  
買受ヒ対談、  
代金壹兩渡シ受取キ、  
外を半紙本五冊預リ、  
壹冊壹匁  
五分位を而御セ話御売付被下度与之旨預示談キ、  
○貳百文塩竈并壹  
文菓子、  
高沢町小松屋重右衛門方へ而、  
○貳百文大黒屋止宿料払、  
○三拾貳文わらんじ貳足、  
下寺山村中野氏へ立寄、  
酒并昼喰之馳走  
を成り、  
八ツ時過を掃路を趣、  
青木村円藏方へ立寄、  
当人方頼母子  
会合也、  
□金貳朱ト錢五百八拾七文掛ル、  
此分金壹分渡シ錢貳百廿  
壹文返リ受取、  
同夜五ツ半過を掃宅

改持金七兩ト錢七百九拾文、  
算勘合、  
廿日夜調、  
右之金不殘金箱  
へ入、  
十一月廿日夜合金拾兩を有之キ事出遣ヒ金壹兩貳朱ト錢壹貫  
廿三文

\*西町桑原孫右衛門——西町は足輕屋敷があつた。

十一月廿一日、坂戸へ行、穀清ト  
金七兩三分ト六百八拾六文米  
代受取、  
豊忠ト  
金三兩三分ト八百三拾三文上同断受取、  
秋山主人  
留守を付不受取、  
○廿文髮結錢、  
○百四拾八文味淋壹合、  
肴むきミ、  
飯貳膳、  
いも、  
油上ケ<sup>(山平)</sup>金貳角權を而飲食之、  
○三百七拾貳文荏四斗

絞り賃也、油屋一統究書ニ曰、壹升ニ付壹合七夕たり、絞り賃壹升拾文、上種壹合八夕并種壹合六夕からし壹合七夕、上胡麻式合三夕、是等者壹升ニ付式拾文之絞り賃、○貳百廿四文唐紙壹升、○百四拾五文麻布式尺三寸五歩、○百文白砂糖、以上太郎次方ニ而買之、但シ金壹分遣しつり錢壹貫百五拾六文受取、帰路ニ石井多藏方へ立寄、<sup>(村)</sup>地方落穂集三冊持参し置<sup>キ</sup>、扶桑拾葉集二・三与二冊、三先生判<sup>口</sup>一冊かり持来ル

持金拾壹兩壹分ト錢貳貫貳百三拾文、出遣ヒ錢壹貫ト拾七文、算勘六文不足、入金拾壹兩貳ト錢壹貫六百拾七文、持出シ錢九拾文入、改持金……錢壹貫ト六拾六文

\* 地方落穂集——江戸時代の地方書、金十四差

\* 扶桑拾葉集——歌集、古今和歌集・年中行事歌合などが収められている。

十一月廿四日、坂戸へ昼ヲ行、<sup>口</sup>金九兩ト錢五百九拾三文秋山<sup>カ</sup>受取、<sup>口</sup>金三兩三分式朱ト錢六百三拾文豊忠<sup>カ</sup>受取、米貳拾俵之代也、夫<sup>カ</sup>同所太郎次方へ立寄、○貳百文黒砂糖、今日見之誹扱<sup>キ</sup>、鑛目方壹匁式歩付<sup>キ</sup>由、<sup>(カ)</sup>鴨目てん金ニ出来居、近日之内受取ニ来リ可申間つけ置具<sup>キ</sup>様申聞置<sup>キ</sup>事  
改金拾三分式朱ト錢壹貫九拾三文

鷗 目——刀、和琴等の紐通の孔に嵌むる金

<sup>(余)</sup>△十一月廿六日、川越へ出勤、餅米御免願可申出旨、昨日御廻状到来ニ付、今朝金錢改持出ル、金三拾兩ト錢貳貫貳百文、四ツ時分過川越着、○廿四文半切角間忠ニ而、○四拾五文今坂もち買、懐ニ入直ニ御役役へ罷出ル、西御門ヲ入与逢初シ人、比企郡志賀村名主忠右衛門、未三拾藏位之人劍術ヲ好ミ、江府内神田おたまケ池ニ住居千葉秀作<sup>カ</sup>之門人なるよし、願書与一所ニ御用印御返上、八ツ時分ニ中・下寺山村、当村与三ヶ村一同御上納餅米当壹ケ年御免ニ被仰付<sup>キ</sup>○廿四文御溜り茶代○百六拾四文昼喰、酒代、江戸町高橋ニ而、○三百六拾四文砥式丁、百八拾八文・百七拾貳文、○三拾貳文わらんし壹足、下寺山源兵衛与同道、御役人様方之御様子聞之、同人居村ニ而別レタ暮帰宅

改持金貳分式朱ト錢百八拾八文

\* 志賀村——現比企郡嵐山町

十一月廿九日、坂戸へ行、秋山<sup>カ</sup>金貳兩壹分式朱ト錢六百三拾六文受取、○六拾四文酒肴代、穀清<sup>カ</sup>金三兩三分式朱ト錢貳百廿四文、米六俵代受取、夫<sup>カ</sup>太郎次方へ立寄、鞆并先日預ケ置<sup>キ</sup>つきもの三品つかせ受取、金むく鑛一ツ、大番かた鋳等受取、内さくりかなも為付、是も受取、九ツ時分帰宅  
改金壹分ト錢四百八拾五文、外ニ金三分也

十二月六日、御代官所へ先年差上置<sub>レ</sub>金之義<sub>ニ</sub>付、妙正寺下小川様御宅へ御召<sub>ニ</sub>付出勤、早朝<sub>ニ</sub>出宅、五ツ時分着、堺町八百喜へ立寄、酒札六枚此代かり、○四拾八文酒肴代<sub>ニ</sub>払、南町通り札之辻<sub>ニ</sub>至り、○四拾文半紙、○廿四文上同断、○百廿四文庖丁<sub>ニ</sub>捲角間喜、夫<sub>レ</sub>御役所へ出勤、才覚金御証文奉差上度段願書上ル、無<sub>レ</sub>扱<sub>ニ</sub>よつて也、預<sub>リ</sub>置<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰聞有<sub>レ</sub>之、夫<sub>レ</sub>江戸町表沼田一<sub>レ</sub>濟方へ立寄、酒之馳走<sub>ニ</sub>成<sub>レ</sub>り、同町名主次原頼兵衛<sub>ニ</sub>逢、鎌形之様子聞<sub>レ</sub>之、本町裏宿通り宮下・安井様御長屋前迄一<sub>レ</sub>濟与<sub>レ</sub>同伴別<sub>レ</sub>レ、五ヶ橋<sub>ニ</sub>而休<sub>ム</sub>、廿四文ひし<sub>□</sub>式かい、○拾五文団子、伊草通り、○八拾八文大式寸・三寸釘<sub>ニ</sub>把<sub>ツ</sub>ツ角麻喜<sub>ニ</sub>而買<sub>レ</sub>之、夕暮帰宅、○五拾六文昼喰代出遣<sub>ヒ</sub>錢三百七拾壹文、残り金<sub>ニ</sub>壹兩<sub>ト</sub>錢五拾五文、算勘四拾壹文不足、改金<sub>ニ</sub>貳兩<sub>ト</sub>錢廿六文

十二月十一日、川越出勤、伊草通り、北町万屋へ書付渡シ、角渡辺へ立寄、山田へ立寄、山田へ反物<sub>ニ</sub>き<sub>レ</sub>れ<sub>ヲ</sub>渡シ、江戸町へ至り高橋屋<sub>ニ</sub>而昼喰、夫<sub>レ</sub>御役所へ出ル、御勘定所<sub>ヲ</sub>被<sub>レ</sub>仰渡<sub>ニ</sub>者、当年者御下金之義、代米<sub>ニ</sub>而被<sub>レ</sub>下、御相場六斗四升替<sub>ニ</sub>御渡シ被<sub>レ</sub>下旨、依之先難有<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>御受申上<sub>レ</sub>、尤志義町小川屋又右衛門方へ行受取可申与<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰渡有<sub>レ</sub>之、当年者御下<sub>ケ</sub>ニ者相成間敷与<sub>レ</sub>奉存罷出<sub>レ</sub>処、存外<sub>ニ</sub>付先者難有<sub>レ</sub>奉存<sub>レ</sub>、但シ金高<sub>ニ</sub>而損者可有<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>共、御下<sub>ケ</sub>無<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>ハ、如何いたし可申与<sub>レ</sub>あきらめ、先心悦<sub>ヒ</sub>ニ高橋屋へ行、鳥鍋<sub>(歌)</sub>為煮酒<sub>ニ</sub>合<sub>レ</sub>之、○百三拾貳文酒肴代、○八拾四文昼喰代、此分<sub>ニ</sub>

近世後期の名主日記について(小暮)

金<sub>ニ</sub>壹兩<sub>ト</sub>渡<sub>シ</sub>壹貫四百文取、錢拾貳文渡シ勘定相濟、○百文<sub>(世)</sub>へ<sub>○</sub>百文おし<sub>(百)</sub>ろい<sub>○</sub>六百文半紙廿一帖、内一帖三拾六文、残り廿八文ツツ、<sub>□</sub>金<sub>ニ</sub>貳分<sub>ニ</sub>式<sub>ニ</sub>朱<sub>ト</sub>錢六百七拾九文、紺小納戸もん、尤式反角渡辺<sub>ニ</sub>而、山田屋買物四品通<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>付持帰ル、○廿貳文墨坪之かなもの<sub>ニ</sub>壹<sub>○</sub>三百四拾八文ま<sub>く</sub>ろ、高沢町鈴伝<sub>ニ</sub>而、小坂通り夕方帰宅<sub>○</sub>廿五文団子

出遣<sub>ヒ</sub>金<sub>ニ</sub>貳分<sub>ニ</sub>式<sub>ニ</sub>朱<sub>ト</sub>錢貳貫百廿文、残り有金三分<sub>ト</sub>錢壹貫九百五拾六文、算勘廿文不足、金<sub>ニ</sub>壹分<sub>ニ</sub>式<sub>ニ</sub>朱<sub>ト</sub>錢拾八文入、内<sub>ニ</sub>壹貫文金箱<sub>ニ</sub>入

\*志義町一<sub>一</sub>現川越市仲町・松江二丁目

十二月十二日、今日茂川越へ參ル、御下米一条<sub>ニ</sub>而、志義町小川屋又右衛門方へ立寄、昨日記之御下米之義及示談<sub>レ</sub>処、御上様<sub>ヲ</sub>御渡<sub>シ</sub>御書代之由拜見<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>処、米七拾俵御渡シ金<sub>ニ</sub>壹兩<sub>ト</sub>錢貳百四拾貳文うち<sub>ニ</sub>御書付也、算勘此米<sub>ニ</sub>式<sub>ニ</sub>俵<sub>ト</sub>壹斗四升五合也、此米御無理也、當時町相場追々下<sub>ケ</sub>レ<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>者、六四<sub>ニ</sub>御売被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>者相成間敷事勿論也、○三百六拾四文鍋<sub>ツ</sub>る四かけ、五ヶ村吹屋五郎右衛門方<sub>ニ</sub>而<sub>○</sub>百八拾四文昼喰、酒代江戸町高橋屋<sub>ニ</sub>而、夫<sub>レ</sub>仙波御山内南院へ行、村方借主共之義及申談<sub>(歌)</sub>へ通<sub>レ</sub>町新田町蓮門前相模屋金藏方へ立寄雅談之上、紀貫之家集<sub>ヲ</sub>かり、夫<sub>レ</sub>堺町八百喜へ立寄、先日之<sub>レ</sub>か<sub>り</sub>○壹貫五百文<sub>ニ</sub>払、但シ酒札六枚代、○四拾四文酒肴代同人方へ<sub>ニ</sub>払、

○廿文髮結銭○貳百文さんま干物廿四枚、高沢麻源ニ而代払、今日往反伊草通り、六ツ半頃帰宅

残り有金、三分貳朱ト銭貳百廿八文、出遣ヒ銭貳貫三百廿文、算勘丁五拾文不足、改持金貳分貳朱ト銭貳百四拾八文

\*仙 波——現川越市仙波、大仙波、小仙、天台宗寺院喜多院がある。

十二月十四日、川越出勤、御郡代所ヲ御召出し、差添村役人同伴也、大方此間奉差上置<sub>ハ</sub>金五拾兩之御証文之御挨拶なるへし与被存<sub>ハ</sub>、今朝、当年番百姓代勝次郎同伴ニ而出宅、伊草通り四ツ半頃川越着、江戸町高橋屋昼喰、酒代○三百八拾八文、夫々御役所へ罷出御届ケ、御郡代・御郡代官兩御役所へ面付差上御溜リニ待居<sub>ハ</sub>、今度者存外ニ御手廻しニ而八ツ時分ニ御召出しニ成ル、御郡代・御手代様之依仰、御郡代御役所之御掾側<sub>(縁)</sub>ニ上リ、夫々御案内ニ而御詰所与御唱之御座敷ニ入、疊三帖様ニすり出テ被仰渡ヲ承知、辺御改御上下一具与御認メ之奉書紙ヲ御渡しニ付奉受書、御郡代所へ御礼奉申上<sub>ハ</sub>、御代官所へ御届ケ奉差上<sub>ハ</sub>、七ツ時分町ヲ出テ、又高橋屋ニ而、○八拾八文、先刻之分与一所ニ払<sub>ウ</sub>、うんとん、そば、酒代是<sub>ハ</sub>勝次郎者婦村いたし可申与及申談婦ル、如例手札認メ南久保町<sub>ハ</sub>小久保町辺御宅廻りいたし、通町・西町・堺町ニ至リ八百喜ニ而、○四拾四文酒壹合、みかん貳ツ、夫々小川・古川御兩所様御宅へ上リ酒切手壹枚ツツ上ケ、今日之御礼并兼而奉申上<sub>ハ</sub>差添人入

用濟方之義申上<sub>ハ</sub>、六軒町通り石原ニ至リ、大黒屋ニ止宿、坂戸村木藤金右衛門へ差添え与頭某与同宿

十二月十五日、快晴ニ成ル、早朝ニ六軒町裏新建齊藤百右衛門様へ上リ、酒切手一枚為<sub>(進之)</sub>晋上、御受ニ不相成<sub>ハ</sub>而御戻シニ付、折角之品なから可差上与心掛持參仕<sub>ハ</sub>、御入納ニ不相成<sub>ハ</sub>得者、本意ヲ失<sub>ハ</sub>仕合之由申上<sub>ハ</sub>得者、左様なら<sub>ハ</sub>与被仰聞御受ニ成ル、御渡し之御米、村方之御年貢米御渡しニ相成<sub>ハ</sub>様ニ与御願申上<sub>ハ</sub>、御承知ニ而小川屋へ申通べく、其方茂一寸立寄可申談与之依仰、又右衛門方へ立寄、及示談<sub>ハ</sub>、昨夜割合いたし<sub>ハ</sub>、為見<sub>ハ</sub>、村方御年貢米貳拾俵、外者他村之米ヲ川越ニ而渡し之書付ニ付工夫いたし具<sub>ハ</sub>様及申談<sub>ハ</sub>得者承知ニ而、御年貢米七拾俵也、其御宅へ付込之用状兩三日之内御出しニ相成<sub>ハ</sub>様執計可申旨之示談聞之、茶ヲ煮テ被振舞、又右衛門母并妻杯茂出テ及対面、先心易相成慶申<sub>ハ</sub>、夫々南町山善へ行、通渡し買物付<sub>ハ</sub>様及申談、善兵衛へ○廿八文羽織紐取替打銭、江戸町ニ至リ高橋屋へ立寄、酒壹合、一先安堵之祝ヒニ飯之、夫々一濟方へ行、留守ニ而不逢、高橋屋又行、飯ヲ為出食之、○貳百拾貳文払、夫々御城内へ入、先方御役所へ御証文差上、御裏印濟ヲ奉願上<sub>ハ</sub>、暫時扣居<sub>ハ</sub>御召ニ付罷出<sub>ハ</sub>得者、只今差上ケ<sub>ハ</sub>御証文、此類數多有之間、一同裏印濟相立可申間、後日御用序ニ受取ニ可罷出、御証文下ケ渡し可申哉、又者預ケ置<sub>ハ</sub>哉与之仰ニ付、御預リ被下度与申上<sub>ハ</sub>、則御預リニ成ル、夫々又沼田一濟方へ立

寄付処、一寸帰り又出宅之由、依之立出付処帰り来り一寸逢、俗談  
作文一冊かし渡し置付、○貳百九拾三文さつま節巻本、へ田へ立寄、  
先刻渡し置付通受取、○百文菓子、○四拾八文わさび(わさび)三本、○貳百  
文大黒屋へ旅籠払、小坂通り夕暮帰宅

残り金壹分貳朱ト錢七百六拾貳文、出遣ヒ錢壹貫四百拾文、算勘  
七文過、改金貳分貳朱ト錢百六文

十二月十八日夜、又改、持出し錢三百六文

十二月十九日、坂戸へ行、片柳村へかかり四ツ時分着、豊忠ニ而、  
□金貳兩壹分ト錢五百四拾文受取、秋山ト□金貳兩壹分ト錢四百九  
拾文受取、○六拾文みりん十ツ、○百六拾文角屋屋喰代、夫ト太郎  
次方へ立寄、○貳百文白黒砂糖、白六拾匁、黒百拾匁、○百拾貳文  
手拭壹筋太郎次へ払、かむ(かむ)さし(かんざし)貳本預ケ目方六匁、紋四ツホリ頼ム、  
同心町一柳軒政茂へ頼ミ壹ツ壹匁位之由、夫ト石井村大智寺へ立寄、  
○五文散、文珠大工へ上ル、仏芽方丈ニ対面、茶并酒之馳走ニ成ル、  
□金三分ト錢五百四拾文、八月廿九日、金廿五兩也預リ金之利、九  
月ト当月迄四ヶ月分壹割之利銀五拾目也相済ス、今日金貳拾兩也か  
り来ル、巳年五月迄与之預リ書付認メ差置付、夫ト同村井上氏本家  
へ立寄、妹\*ち女ニ一寸対顔、當時節之様子聞之内日暮ニ相成帰  
宅

出金三分ト錢壹貫八拾六文、残り金三兩三分ト錢貳百丁五拾文、  
算勘合、十九日夜調之、入金四兩貳分ト錢壹貫三拾四文、金貳兩、

近世後期の名主日記について(小暮)

廿日朝入

\*き ち——信海の妹、石井村井上佐文次に嫁ぐ。

十二月廿日、川越へ源右衛門同伴ニ而參ル、途中ト四郎兵衛と同  
道、入間川辺ニ而源右衛門与別レ、下寺山村名主平内方へ立寄、又  
中寺山村与頭次郎吉方へ立寄、兩人与同伴ニ而町ニ至リ、高沢町有  
馬屋三次方へ行、夫ト源右衛門与同伴ニ而江戸町高橋屋角右衛門方  
へ行、○五百七拾貳文屋喰酒代払、夫ト御役所へ罷出、権次郎日切  
之御届申上、又同屋ニ立帰り、夜ニ入、四軒下鯉節四袋買之、此代  
銀廿七匁貳分源右衛門へ出し置付、糯米俵数ニ割合、中・下寺山四  
俵ツツ、当村拾俵分金壹分ト錢拾四文、四俵分錢六百五拾三文ツツ、  
此屋ニ五ツ半頃迄居、○貳百拾六文酒四合肴代、夫ト石原ニ至リ大  
黒屋ニ止宿

十二月廿一日、未明ト起、支度いたし、兩寺山村役人ヲ待居、○  
四百文止宿料渡ス、御宅廻りいたし付而志義町小川屋又右衛門方へ  
立寄、当御渡し御米代金壹兩貳分ト錢貳百四拾貳文渡ス、是者御渡  
し金之外之過米強御売付之米代也、○三貫八拾文高沢鈴木屋伝造へ  
肴代通ニ付付分払、○百文金平糖、同町小川屋孫七へろろ肴代、  
□金三分ト錢七百三拾貳文払、夫ト江戸町高橋屋角右衛門方へ行、  
皆々寄合酒肴とり飲食、□金壹分ト錢拾四文源右衛門へ昨夜立替鯉



節代渡ス、□錢廿四文時かし、此屋之払錢兩寺山兩人ニ任せ置、帰路ニ趣、○貳百六拾文白木線さらし六尺、下小坂店ニ而、三田ノ戸右衛門伴徳次郎今日御郡代所へ御召ニ付出勤帰ルヲ呼かけ、同伴七ツ過ニ帰宅

出遣ヒ錢五貫六百三拾八文、外廿四文源右衛門へかし、同金貳兩沓分外金沓分ト拾四文、同人へ渡シ、残り金貳兩沓分ト錢八百三拾七文、付落之分、○貳百拾八文、こまめ八十文、数字百六拾四文、出改金貳兩貳分ト錢五貫九百四文、為金三兩沓分式朱ト錢貳百拾六文

\*こまめ——こまめカ

※十二月廿五日、雨天、中小坂村栗原氏へ源右衛門始メ九人連ニ而行、来春御拝借被成下様ニ而申頼、夫々八人者帰村、己者広谷村ニ出テ志もと原之中道通り坂戸ニ至リ、角屋昼喰、○百廿四文酒代共、□金沓兩式朱ト貳百三拾七文、秋佐ノ米式儀代□金金沓兩式朱ト貳百六文豊忠ノ上同断、○七百六文広紙三ノ半、○廿八文半紙沓帖、○廿文髪ゆひ代、片柳ノ耕地道、飯盛川辺ヲ下リ米川森之際ニ出、七ツ半頃帰宅

遣ヒ錢八百七拾八文、残り有金五兩沓分式朱ト錢三百七拾三文、改持金沓兩式分ト錢九百七拾三文、内百四文遣ヒ

\*広谷村——現川越市下広谷、鶴ヶ島町下広谷

※ ※ ※ ※

以上、林信海の「他出記録」の中で、天保十五年(一八四四)の一年間について紹介した。これによれば、同年中の信海の外出日数は総計七十八日になる。その内訳を示すと、

一月——六日	二月——二日	三月——十八日
四月——三日	五月——三日	六月——八日
七月——二日	八月——十一日	九月——三日
十月——四日	十一月——九日	十二月——九日

である。

外出先のほとんどは川越・坂戸及びそれら周辺地域であるが、その中で、三月は江戸へ行き、国学者清水光房を訪ねるなどもある。外出日数も他の月よりは多くなっている。